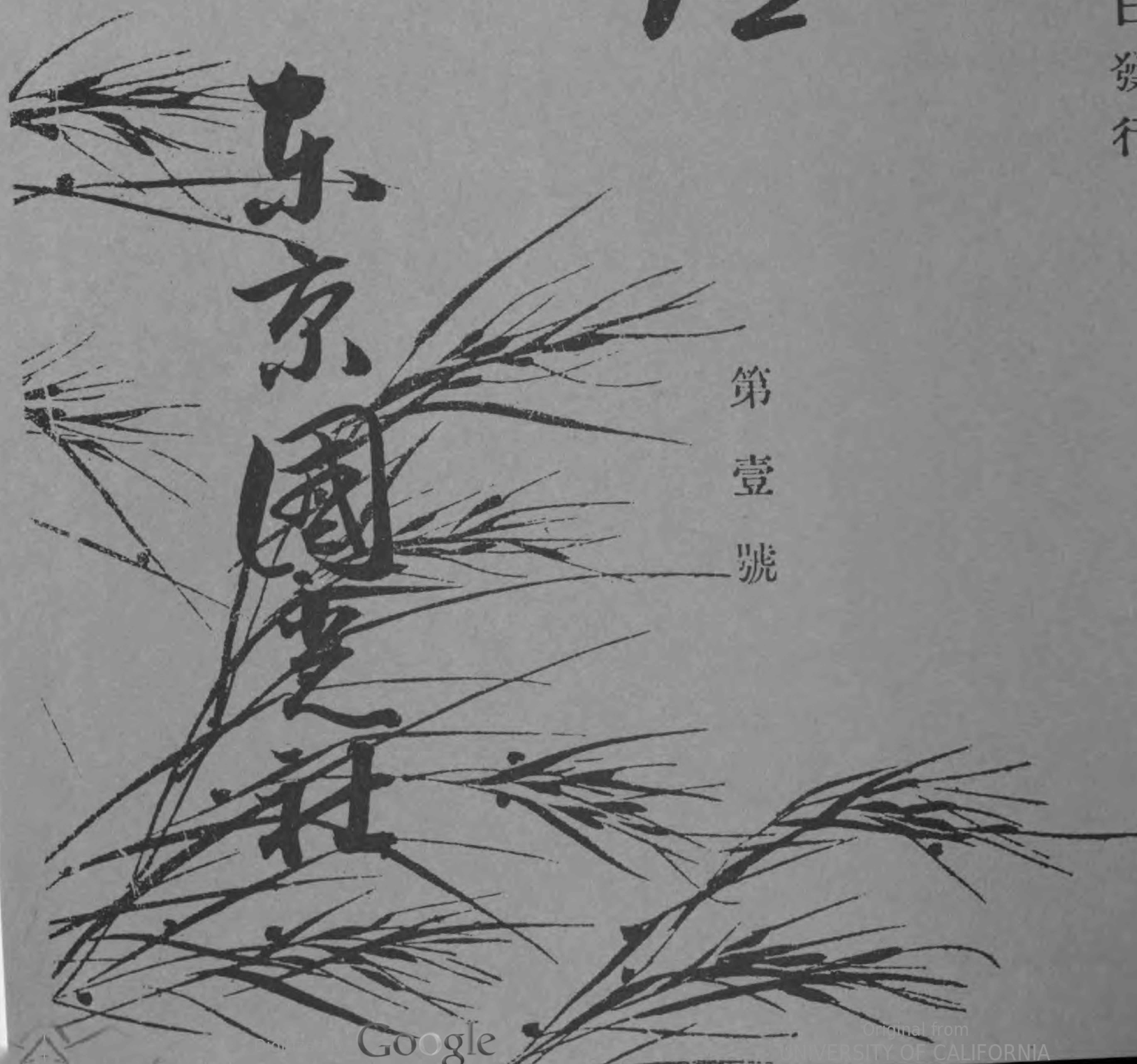
女鑑

明治廿四 … 日發行

第壹號



東京國光社

女鑑第壹號目次

祝詞

祝女鑑發行

伯爵 東久世通禧

世勢の變、人慾の私、大道時に汚隆なき能はず。然れども正は終に邪に勝ち、暗極まれは明を見る。

皇政一新して、文運旺盛なり。但女子の教育は、其の事至難、中を得る所以の道期し易からず。勵精達理の當局者と雖も、或は善美を求めて、適弊患を買ふを覺らさるの恐あり。理論に失するの病、實に戒むべし。

夫れ我國、貞淑順良、古來の婦道、國体人心と共に、動かすべからざるものあり。一朝にして俄に之を變更破壞せは、一家如何して齊ひ、一國如何して治ら

む、思はさる可けんや。

深く此の點に憂慮する處ありて、空論を斥け、躬行を勸め、以て女子教育を指導開發せんと欲して、女鑑世に出つ。吾願ふ。其の至誠の精神、能く人心を感動風化し、冥々の裡　皇化を裨補し、世道を興起するの日を見むことを。吸々囂々は、筆舌者の流弊、特に女鑑の忌む處なるべし。常に暗處に力を着けて、敢て或は懈る勿れ。

女鑑乃發行を祝す

西村茂樹

女鑑發行の擧あり、友人西澤之助君、余に一言を徵せらる。余本朝の歷史を按するに、本邦の婦人は、其の婦德を備ふること、他國に超越せる者の如し。貞

節なり、孝行なり、慈愛なり、順從なり、勇氣なり、節烈なり、智慮なり、節儉なり、母道なり、文才なり、何れも古代の婦人に於て、其の先蹤を示さゞるはなし。若し教育其の宜きを得るときは實に世界に冠絶するの婦人を生するなるべし。然るに古代より惡風俗の爲めに、大に婦德を敗りたること二回あり。其の一は、奈良の朝より延喜天曆の時代に行はれし、華侈浮薄の風なり。其の二は、元祿寶永の頃より盛んになりし、演劇俗曲の流行なり。此二者、何れも婦人を導きて、淫蕩の惡道に陷らしめ、糞泥を以て、完美の名花を汚したり。維新以來、婦人の教育、大に行はれたれとも其の教育は、果して能く婦人の美德を養成するに足る者なるや、少しく疑なきこと能はざるなり。女鑑よ女鑑よ願くは、世間教育の缺處を補ひて、天稟の良質ある本邦婦人の美德を發達せしめよ、

是本邦操觚家の務なり。又愛國の志厚き日本國民の務なり。

女鑑乃發刊に

土方子爵夫人龜子

世に少童の教育バかり、大切なるものはあらずなん。男女とあるが中にも、わきてをみなの子は、生長して人の家に嫁し、表にたちて業をつとむる夫を扶け、裏に居てうち〱の家政をとるものなれば、つねに質素節儉をまもり、祖先のまつり夫の交際すべて深切にとりなし、また出生の子ありて其の子をそだつるには、愛におぼれずねむごろに、よく〱をしふべし。諺にも、三ッ子のこゝろ百までといふことあり。さて學齢の時きたり、小學校にかよはせても、ゆだんなく心をつくべし。よく生立もわろくなるも、子の教育はおほかた母親による

となん。むかしの賢婦いまに其の名きこえたる人々の上を思ふに、みな夫のわざを助け、世に功を立てさせ、其の家を興し、また、子の教育をよくして立世出身の名をあげさせし類、慈母の婦德より導びきて、譽を殘す人とはなせるものなり。乳をふくませて吞ましむるより、傍さらずまつはれば、おのづからしたしみあつく、父親の如く遠慮して心もおかず、なれてむつまじければ、賢愚その性の眞心あらはれて、よくしらるゝなり。子の教育は母親にありといふも、宜なることなりけり。さて又、女生の良否をいへば、國の盛衰家の興廢、女子の心にひかるゝものなり。さればをみなはおよばぬまでも、其の婦德を修むべきに、近きころ女子の教育盛れるにも似ず、婦德のやゝおとろへゆくは、いとも嘆かしき限になん。これにより、こたび國光社にあらはせるこれの女鑑は、

そのうつすおもかげの人を、世にあまた作り出さんとて、ものしたる書としきけば、見る人心とゞめてよくよく其のよきをとりよくまもりて、よきをみなとなりねかしかし。

女鑑乃發行を祝す

高島子爵夫人春子

今將に盛ならんとして、種々の障礙多き女子教育のため、端正純潔なる女鑑の世に出て、この道を照らさんとするを聞く。上はすめら御國のため、下は我等のため、これに增したる喜やある。唯鍛錬倦ます、研磨怠らす、煌々の光、終には外國までも及バんことを祈る。

女鑑の發刊を祝ひて

何夫人たに子

國の光のよろしきは、申までもあらねど、わらはどちの女のよまんには、いとたゝみのたきにすくれはとて、此度女鑑といへる文を出されたり、そも〳〵人は、見めより心とか申せは、垣のにこくさにこやかにして、門の柳のすなほならんこそ、あつかしうもゆかしうも侍れ。此文は即ち其心の鏡にて、こらはとちのよみやすきやうにせられたれは、國の光とともに、世の人ももてはやすらんと、れもふよしをしるして、祝辭のかはりとす。

世の中の人は心をみかけよと見する鏡はこれの此文

女鑑の發兌を祝して

土岐夫人理世子

すべて、よきことも、上ざまなる少き人の間にのみ用ゐられて、下ざまなる多き人の中に行はれざれば、何の益かあらん。かの鏡の如き、其の品の善悪は、とまれかくまれ、高き殿に住ませ給ふ貴人も、柴庵に住める賤の女も、朝夕手にとりて、姿を寫さぬ人とてはなかるべし。かく上下の隔なく、其の用をなしてこそ、物のかひはあれ。さて、今の世の中は、學びの道のひらけたりとはいへ、いまだ人により、事によりては、讀みかぬるふし〴〵、解きかぬることゞもありて、思はぬ道に踏みまよふ人少からずとぞ、かくては鏡の曇りて、其の用をなさぬに均しかるべし。さるにこのをみなのかゞみ、一度世に出てなば、誰

もたやすく讀み、たやすく悟りて、あらぬ道に蹈まよふ憂もなかるべし。されば、なべての人の、高き賤きをいはず、手に取りあげて見んことは、今より思やらるゝぞかし。昔の唐土人は、常に曲りたる笠を被り、其の影を見て、おのが心の曲りたるを直したりとなん。かれとこれとは、事變りたれど、其の心を用うるに至りては、一つなるべし。あはれ、世の姫等よ、今より後は朝な夕なこの曇りなき女鑑におもなれて、姿を正うし、心を直うして、くもりなき鏡の用をなすが如く、世のためとなるべき事に心を注ぎて勉め勤しみ、かりにも浮きたるふるまひなくして、世の人にたふとまるべく、心を用ゐてよと女鑑のうらに思ふことをかくなん。

祝詞

長瀬夫人 鏡子

花におく鶯、水にすむかはづ、いつれか歌をよまさりけると、いへるは世よありとあらゆるものは、みな神ながらの道もて、眞事の言の葉言出さるなきをこそいふなれ。かの聖の松風溪の水も、こと〴〵く法の道とくとのたまへるもおなじきや。我御國ぶりは、あたし國にすぐれてまことの道の明らけく、そがあかしは大和歌にぞ有ける。其ゆゑに國人のやまと心をもたんには、幼稚よりうたよまんことを、まなはしむるにしくものはあらし。唐歌のことあやなると、あげつらひおほきは中々に眞心の底ひ淺きをおほゆるこゝちす。この女鑑てふふみは、神代ながらに傳へこし、道を本とし、歌をもそへてをみな子ををしへ、大和こゝろをよにおほしたてんと、物したまへるそのま事によにこよなききさちに

ぞ有ける。されは大御代の御光をかゝみとなし、千代八千よとともに、はぎ侍らんものとひとことゝのくなむ。

敷しまの大和こゝろをえかゝんととくやれのれの鏡なるらん
くもりなき御代の光をかたみにて大和こゝろをみかけとそ思ふ

こたび世にいで給はむ女鑑の御許へ　三木敎子

いまだまみえ奉らねど、日にそへてまさる暑にもつゝの恙ましまさず。こたびいよ／＼世にいで給ふべきよし、日頃の御志もあだならで、かくなりゆき給はんをおもへば、相しらぬわらはがうれしさもなにゝかまさりはべらむ。申し侍らむもふりにたる業なれど、人は容貌より心のうるはしくたゞしからむ

こそ、たふときことに侍るなれ。短か世の人の命は鳥部山の煙とたちさり、屍は苔むし、地の下にうづもれぬるも、かぐはしき名の残りとゞまりて、千代を八千もこの世にかをりあらはるゝは、たゞこの心一ッによれるになむ。こはわらはのみかくおもふに侍らず、古よりいひつぎかたりつぎいと明に侍り。さは申せふとあらはるゝ所をのみ飾りて、みえぬところをすておき、一時の譽をもとめて、万代のそしりを忽にするは、世の人の常に侍れは、自は己がひが心を正し侍らむ様もなく、とげつゝむいばらの花のうるはしきが如くにれみなりゆくは、いと悲しきことにはべり。まして女はうまれながら容貌なよやかに、立振舞優にやさしきものに侍れは、人もそこをめで自もそこをいみじと思ひ、いつしか心のゆがみゆきて、行のよしあしをぶにさきかぬるこそ是非なきとゝ侍れ。

それ、あることと久しければ鐵もくさりてさびとなり、角ある石もすれて圓くなるならひに侍れば、あしきを一のへしてよきにおさむは、難しとも難しとも、いとかたき業にや侍るべき。そを見明らめ給ひて、もとの正しき心をば、そがまゝにおふしたて、又すでにまがれるをば、つぎ〳〵これに照らして正しくなせかしと、直澄のかゞみうるはしくあらはれいで給ふぞ、げにかげたかき極みに侍る。こはかりそめの業ならねば、もし世のつねのかゞみならんには、或は曇ることもやとうれふべく侍れど、大和島根にいく千年といふかぎりなく、きたひみがかれ給へる心をもとゝし給ふことなれば、そは心の外におきて侍らむ。されど千丈の堤も蟻の穴よりくづるゝためし侍れば、いよゝたゆみなくみがきにみがきて、塵ばかりの曇をも世にあらはさじといそしみ給ひてよ、さあらむに

は國の榮ゆるかぎり姫君たちの親ともたのまれ、師ともうやまはれ給はんこと、御名によそへてみるよりも明かに侍り。筆とゝめて窓うちあくれは、前栽の女郎花、枝葉しげりて、花さかむ秋も近きに侍らんとす。あはれこもまた御行末の榮ゆくべきしるしにや。いとあやしきことのはには侍れど、うれしさにつゝみあへでいさゝか祝辞にとてかくなむ。つくさぬはまみえまつらむをりにこそ。

あなかしこ。

女鑑 第一號

發行の趣旨

歳月は流れて水の如く、しばらくも止まらず。明治の大御世も、已に二十四の春秋を迎へぬ。顧みれば、維新の慶雲四方に棚引き、文明の德暉東の空に顯はれ初し頃、襁褓のうちに、あどけなく頬笑みし稚子、花邊蝶を追ひて、無心に日を送りし少女、いつしか綠鬢嫋々として、其の大人びたる言容は、却て廿餘年前己を愛育せし母とはなれり。日本社會の半面を形る妻とはなれり。壬辛の八月、學制始めて發布せられ、學校の創設せらるゝや、始めて椅子に凭て單語篇を讀み、學問のすゝめを敎へられ、某處の試驗に、勸善訓蒙の講義をなし、某吏の面前に、世界國盡の諳誦をなし、怜利なる孃娘と譽められしも、一夜の夢

と過ぎさりぬ。

其の後、西風漸く競ひ、歐洲文物の輸入愈々旺盛なるにあたりて、濶袖は蜂腰の服と變じ、女大學はリーダアと化す。從ふところの教師は、西洋婦人にして、就く所の學校は、耶蘇教會なり。未一行の書牘だに解し得ずして、先歐語を修め、朝夕の禮節もしらずして、交際を衒らふ。政治、法律學ばざる可からぞ。理、化、哲學究めざる可からず。男子已に國家を經營す、女子豈社會を造成せざらんやと。先輩は之を導き、後學は爭ひて進む。其の熱度の極點に達せるや、優美温和の美德は、屹屼疎暴の風となり、質素、儉勤の慣習は、浮華潤飾の俗となる。遂に女演説家現はれ、女壯士出づるに至る。斯の如き教育は、實に今日の妻母を養成したるなり。而して未來の妻母は、如何なる教育中に養はれつ

ゝあるか、當路の人大に見る所あり、女子も亦大に覺悟する處ありて、教育の法も一變し、女子必須の學科稍ゝ備はり、之を昔日に比すれは、大に其の歩を進めたるもの丶如し。然れとも試みに幾年の後を想察せは、如何なる母出づべきか。如何なる妻あらはるべきか。顧一顧すれは、未容易に領すべからざるものあるを知るに足らん。

我國古來より、婦女にして文字を讀み、技藝に長ずるもの多きこと、今日の如きは、未嘗てあらざる所あるべし。然れども日本女子の特有なる貞操、節烈、優雅、溫柔の美德青史に輝き、千歳に芳はしきもの、今果して何れの處にあるか。唯巧言利口、徒に表面を脩飾して、才名を衒はんとするの風盛にして、日本女子の眞相たる美德は、其の敗頽年一年より甚しきを見るあるのみ。己漸く

傍訓の新聞紙を讀み得れは、家嫗の迂遠を嗤ひ、僅に一片の修業の證書を有すれは、其の夫を蔑にす、而して又女權の擴張を唱ふる者の如きに至りては、吾人言ふ所を知らざるなり。既に傲慢を以て心を充塞す。何ぞ靄然たる婦德あるを望むべけんや。世に變遷あり、時に勢あり、夫を扶け、兒を育する、固より學びて、以て其の道を明にせざるべからずと雖も、僅に其の技末を修めて、却て其の天性を損するか如きは、寧ろ始より學ばざるのまされるにしかざるなり。

全國幾所の女學校、其の建築の宏壯、其の規摸の宏大なる、眞に良妻、賢母を養ふに足るもののあるべし。貞淑なる德性を涵養して、文明世界に於ける婦女たる者を、養成するに足るもののあるへし。然れとも門戶の美は、未以て其の堂奧の如何を窺ひ知るに足らず。濟々たる女學生中、外面の裝飾これ事とし、却て

本分を忘るゝもの多きには居らさるか。「山高ミ、常にあらしの吹く里は、匂ひもあへず、花そ散りぬる。」賴少き日本今日の、女子教育にそある。他日の妻母、亦甚想像しがたからざるなり。已に貞淑れ妻母を得るあたはず。何を以てか、優順貞烈の女子を成出するを得ん。女子教育の要は、今更之を云ふを須たすといへども、凡何の邦國に於ても、其の一代に爲せる功蹟は、其の名聲こそ、男子に皈すれ。其の之を扶けて、成就せしめし隱微の元力は、皆女子の勸奬に因らさるはなし、陣頭馬を立て、敵軍を睥睨し、旗を奪ひ將を擒にして、偉勳を奏するものは、決して大將一人の力にあらず。これか手足たり、腹心たる士卒のあれはなり。女子の男子に於けるもまた此の如し。今日の女子果して、明治の男子を扶翼して、後代に貽すの偉業をなさしめ得へきか。畢竟するに、女子

教育の本旨は、其の淑徳を啓發して、男子の功業を扶くるに足るべき、良妻たらしむるにあり。健全忠勇なる兒孫を養成すへき、賢母たらしむるに在り。技藝智巧の如きは、枝葉のみ、根幹にあらざるなり。其の末を重くして、其の本を忘る。これ女徳の敗壞、今日に至れる所以なり。

抑人心の陶冶は、決してこれを區々たる規則、儀式の間に求むべからず。燦然たる徳光を仰望し、感憤興起して、自砥勵するの功を積むにあらざれは、能はさるなり、我日本女子の徳性は、邦家本來の体相に基き、高尚善美なる道義の自然にそなはれる歴史の明鏡に鑑みて、以て涵養せざる可からず。否らされは其の範とする所、却て古有の特性を害ひ、所謂江北の枳となるべし。啻に一世の害物たるのみならず。其の毒流れて、後世子孫に及び、幾千万年、金甌無缺の

神州も、漸く傷れるゝに至らんか。

今や文運隆盛にして、女教に關する書冊、汗牛充棟も啻ならず。智を開き、能を進むるに足るもの、畧備はれりと雖も、動もすれは綺辭繡語を連ぬ、世好に投じ、時流に走り、眞の日本女子を敎導するに、足るの價直なき弊あり、或は其の說く所、德行に及ふものあるも、大方江南の橘を摸倣するに過ぎざるのみ、其の能く今日の流弊を矯正し、以て將來婦女子の指南車たらんとするものあるを見す。試に幾年の後を想察せは、如何なる感慨の湧出し來るへきか。女鑑の發行是に於てか、止むを得さるに際會せり。

女鑑は、貞操節義なる日本女子の特性を啓發し、以て世の良妻賢母たるものを養成するを主旨とす。而して之に副ふるに、學藝、技工の端緒を以てし、以て

幹枝の両全を期せんとす。誠にこれ邦家進運の本源、功遠くして事大なり。冀くは満腔の誠心以てこれに従はん。

女子教育論（一）

女子教育、はこれを見るに甚大切ならさるか如くなれとも、世間これより大切なるはなし。是を以て明治維新以来、一人これを唱へて、萬人これに和し、女学校の設、卒然都鄙至る所にあらはれ、西土鳥跡の字、忽ち繊手に成り、南蠻鴃舌の音、頓に嬌喉より出て、遂に一にも女子教育、二にも女子教育といふに至れり。其勢誠に盛なりといふへし。

然れとも今日の女子教育を説くもの、徒に其の大切なるを嘖々として未た深く其

の理を究めず、間々茫乎として風を捉へ、雲を掴むの如きものあり。これ豈痴人夢を説きて、群盲これに附和するの嘲りを免れんや。蓋女子教育の大切なる所以を知らんと欲せは、まづ女子の天下に於ける職守を知らさるべからず。それ女子の職守は、多端にして一ならすといへとも、これを約して二となすことを得べし。一は夫に奉事することにして、一は子女を教養することこれなり。天下に國ある所以は、天下に家あれはなり。天下に家ある所以は、天下に夫婦あれはなり。而して夫婦の相集まりて家をなす所以は、實に夫、外事を治め、婦、内事を治るに因るなり。夫、外事を治む、故に其の職守大なり。婦、内事を治む、故に其の職守小なり。職守の小なるもの、職守の大なるものに奉事するは、天下の常理なり。然れども其内事を治めて以て家をなすの功は、決して

鮮少なりといふべからさるなり。夫、既に外事を治むるを以て其職守となす、常に子を教養するの任に當ること能はず。婦、既に內事を治むるを以て、其の職守となす、素より子を教養するを以て、其の任となさゝる可らず。夫もし公事に盡すを以て其分となさゝらむか、國の亡ぶる眼前に在らむ。婦もし子を教養するを以て、其の任となさゝりしかは、人の類の滅したること既に久かるべし。

近來二つの謬見僻說ありて、將に大に女德を壞敗せんとするの勢あり。一は男女同權の僻說にして、一は女子獨立の謬見なりとす。この二者の學理上に於て、毫末の價直なきことは、次號の紙上に於いて詳論すへきを以て、今は唯、其の餘毒の國を蠹し、家を賊するに餘りあるを一言せんと欲す。

男女果して同權ならんか、其の勢支離滅裂、男は男たり、女は女たり、夫は夫たり、婦は婦たらさるを得す。男は男たり、女は女たらは、天下何を以て、夫婦あることを得ん。夫は夫たり、婦は婦たらは、天下何を以て、家あることを得ん。夫婦なく家人なくんば、天下何を以て、國あることを得ん。輕佻浮薄の女子、大にこれらの說を奇禍として、頻に其の毒舌を弄すれとも、彼れ等は素より、德修まらす、學正しからす、其の匹を求むるに急なれとも、一人のこれに應するものなきを怨むのみ

若し不幸にして、世人これを以て眞理となさんか、天下日ならすして數千年以前の野蠻時代にかへらざるを得す、豈畏れさるを得んや。男女同權固より非なり而して其の女子獨立說の如きは、最も蠹毒の大なるものとす。何となれは、

天下の女子皆獨立せんか、其の勢男女相集まりて夫婦となり、以て家をなすこと能はされは、人の類遂に滅絶に歸すべし。今日は幸にして、天下の女子、皆獨立せんとするか如き狀なきを以て、此に杞憂を要せざる如しといへとも、この邪說の爲に惑はされて、五十年の生涯を憤怨、憂愁の裏に送らんとするもの、世間往々にして其の例なきに非す、豈憐まさるべけんや。女子敎育の道、苟も一歩を誤まれは、其の餘毒遂に國を蠹し、家を賊するに至ること此の如し、誰か女子敎育を大切ならすと謂ふや。

今日女學校の設け、都鄙至る所に備はらさるなく、女學雜誌の發兌、其の數幾何なることを知らす。然れとも皆果して女子敎育の大切なるは、其の天下に於ける職守にありて、其職守の一は、夫に奉事するに在り、一は子を敎養するに

在るを知らしむることを悟らざるや否や。これ吾人の大に憂慮に堪へさる所なり。

論説

婦職といふことにつきて　子爵岩下方平

女の爲む業は數多かめるを、人の妻となりたらむ後、家内の事よく治むるより重きは無かるべし。我が夫を助けて、その家のなりはひにいたづくより始めて、舅姑に事へ、兒等を養ひ、さては裁縫炊爨のわざに至るまで、皆妻たる者にそなはれるつとめなりかし、さてかく數繁き家の事ども治めんには、學びの業を修め、智識を開く事、固より必要なるにはあらめど、何よりもいや先となるべ

きは、一つの誠心といふものありけり。かの詩經といへる書に見えたる采蘩采蘋などの詩こそ、こよなき模範なるべけれ。こは外つ國の昔にして、しかも今よりは三千年のいにしへに成れりしものなれは、今の我が國に則をとらむこと、少しいかゞなるやうにはあれど、人情といへる者は、彼も我、も今も昔もかはるべきものにしあらねば、大なる差ひはあらざるべし。又その詞はいとをさなげにて、おもては事も無きようにはあれど、つらく\に味ひもて行かば限りなく妙なる意をも覺りいでつべし、いで今そのことばを擧げて、聊ときこゝろみてむ、采蘩の詩にいへらく、

于以采蘩。于沼于沚。于以用之。公侯之事。

于以采蘩。于澗之中。于以用之。公侯之宮。

被之僮々。夙夜在公。被之都々。薄言還歸。

此の篇は、小序に夫人不失職也と有りて、諸侯の夫人の萬の事ども善く治むるをいへり。されど短き詞の中に、くさ〴〵の業一つびとつ連ね擧ぐべきにしも有らねば、その旨とある祭祀の事によく仕ふるさまをのべて、其の他の事ども推し知らせたるなり。首の章の大意は國君の夫人、公侯たる我か夫の爲たまふ御祭に、物そなへんとて、自あたり近き沼の中水の沚に下りたちて、蘩草を摘み采るとなり。次の章も大方は同し意なれど、たゞこの度は、家遠き奥山の谷のはざまに分け入りて采るをいへり。この二章はいつれも、夫人その身の尊きを思はず、自つとめいそしむさまをのべたるなり、卒の章の大意は、夙に起き夜半に寢ね、公の側に在りて御祭の事執るより始めて、事畢へて御前を罷る

に至るまで、頭の飾りどもうるはしくとゝのひて、少しもうち亂れず、常に威儀正しくて、つゝしみつゝしめる意をば示せり。さてかくつとめいたしむも、つゝしみつゝしむも、皆誠心のあらはれたりしなり。かの蘩といふは、少しのかをりこそはあれ。大方させるふしもなき草にはあれど、神は誠を享け給ふといへば、必しも甘らに聞し食し給ふなるべし。されば此の詩は、當時の詩人が、夫人の誠心あるより、かくいそしみつゝしみて、己が職を失はざりしを稱へたりしなり。采蘋の方も、大方同じ心ばえなれば、今はもらしつ、あはれ婦職のこと、これにて足りぬべし、この心をもてなりはひを助けなば、家富み榮ゆべく、この心をもて舅姑に事へなば、必その心を安めつべく、この心を以て兒等を養はゞ、必善き人となりぬべし。この外裁縫炊爨の微事に至るまで、悉この心を

もて行ひゆかましかば、家の内何一のは齊ひ治まらざるべき。若又この心ならましかば、たとへ歌舞管絃の藝巧に挿花茶の湯の能有りとも何にかせむ。たま〳〵家を亂らん楷ともなりぬべくこそ。

婦女の道德

大闕克

敎育の本を正さゞる可からず

女鑑の發行するは何の爲ぞ、女子の德行を導く所以なり。夫れ人の敎育を待つことは、猶艸木の培養を待つが如し。若し其の培養の力を假らずして、成長を遂くる者は、雜草散木のみ。人として敎育無き者は、凡人愚民となり、人の人たる所以の用を盡さずして終る。これを譬へば、猶稻の粃のごとし、稂稗の熟

せるに如かざるなり。然れは教育は一日も忽にす可からず。是を以て學校の設ありて、人々をして各其の德行を成し、材能を達せしむる者、由りて來る所久し。近世以來文運日に益開けて大小公私の學校、都鄙に星布し、蜑戸の兒女、樵家の子弟も、學に入らざる者無し、盛なりと謂ふ可し。學問の道既に盛なること此くの如し、誠に宜しく世に、不良の子弟、醜行の兒女を絶つべき理なり。而るに汚名を傳へ、臭聞を遺す者、更に多きを加ふるに似たり。是れ甚ぐ怪しむべし。蓋教育の方たる人性の正に遵はずして設けたる者は、人を欺罔するなり。才力の分を量らずして施す者は、人を矯誣するなり。欺罔と矯誣とは、たまく人をして其の本心を放失せしむるに足る者あり。其の學ひて得たる文と智とを以て、不良の心と醜行の跡とを修飾して、自欺き、人を欺き、此

くの如くにして身を立て、此くの如くにして世に處り、此れを以て立身の道、處世の要と思へる者あり。今試に其の人を求むるに、漢の王莽、唐の武曌の如き、蓋其の尤なるべし。後世の人教育の方に誤られて、夫の二人の徒たる者少からず。然して之れを誤る者、始めより人の子を賊ふことを知らず。誤られし者は、其の本心を放失せることを知らずして終る。嗚呼亦悲む可し。夫れ人過ちて後に能く改む、今の人誠に後世教育の失に懲るゝことあらば、宜しく正道を求むべし。抑德育は本なり、智育は末なり、體育は本末に渉りて、皆これ無かる可からずして、男女素より當に其の方を異にすべし。然り而して德育は人の本性に原づき、智育は其の人の才に由る。勸めて強ひず、科業を多くせず、こゝに遊びこゝに息ひ、これを藏めこれを修めて、これを自得せしむ、是れ其

の要なり。教育を以て弁木の枝を矯揉して、或は曲り或は直からしめ、又馬に銜勒鞭策して、服従せしむる如き者となすは非なり。又人生れながらにして、善良なる者に非ず、之れを喩へば皆病者なり、教は猶薬を與ふるが如しとするも非なり。徳義は習慣の性なりと云ふも非なり。夫れ天（造化の神を謂ふ）の物を生ずる、此の形色を具へしむれば、又此の形色の儀則を具へしむ。儀則これを性と云ふ、性とは生の本質なり。俗言にスジヤウと云ふ稱これに近し。例へば馬の形色具れば、人を乘せて駛く奔り、牛の形色具れば、重きを載せて遠く行き、蠶の絲を吐き、蜂の蜜を釀す等に至るまで、自然にして知り、自然にして能くする者は、皆其の性なり。性は形色の儀則なり。故に既に此の形色を具へて、此の物と爲れるときは、此の性の外に出でゝ知ること能はず。又この性の外に出

で動くこと能はず。是を以て雞は晨せざらむと欲すとも得可からず。犬は吠ざらむと欲すとも得可からず。水は必潤下して、火は必炎上す。是れ天の賦與せる儀則にして、物の私に變易すること能はざる所なり。是れ人も亦然り、生れて此の形色あり、由りて此の儀則あり、此の儀則たるや、人類の特有する所にて、万物の及ぶこと能はさる所なり。故に人を稱して天地の生最貴き者と云ふ、言意は天地の生ずる万物の中に於きて、人ほど貴き者は無しとなり。然れば人と生れたらむ限りは、其の貴き所以を保たざる可からず。若其の貴き所以を戕賊するときは、形色は縱生（頭れ上に在り足は下に在りて竪行するを謂ふ）たることを失はずとも、言行は横生（五官地に朝して横行するを謂ふ）の物と擇ぶこと無きに陷る。此の類、之れを人頭畜音と謂ひ、人面獸心と謂ひ、又人非人と謂ふ。是れ人道の敎無きこと能はざる所

以なり。今や人皆教へざる可からざることを知れり。然も教育の方に至りては、未盡さゞる者有るに似たり。夫れ德義は、人の形色に具へたる儀則たり。此の理未推窮せられざるときは、人の此の世に生れ生きて此の世に處るには、何事を爲すか天の吾れに命ぜし所なるやを知らず。人の人たる所以の天命を知らざるときは、將に生の欲にのみ使役せられ、徒に衣食宮室の務に奔走し、才智、技藝壹に貪利の用に供して已まむとす。之れを人道無しと云ふ。古に在りて、道德の行はれざる人類を指して、夷狄禽獸と謂ひしは是れなり。然れども道を知らざる者は、唯縱生と横生との別あるをのミ見て、儀則の殊異あることを知らず。人生の事業は、細大と無く皆生の欲を遂ぐる所以の具にして、教學と雖も亦生の欲を遂げしむる所以の一方に過ぎず。才智

は、生の欲を遂ぐる爪牙にして、德義は、生の欲を遂ぐる所以の粉黛なりと思へり。是れ豈、憂ふ可らざらむや。善を爲すは、登るが如く、惡を爲すは、崩るゝが如し。道をして世に明ならざらしむるは易くして、人をして道を行れしむるは難し。百年の後をして、夷狄禽獸の域に陷る憂なからしめむと欲せば、豫これが防閑を爲すこと今日に在り。然らば之れをせむこと如何、曰く敎育の本を正すに在り。敎育の本を正さむと欲せば、先性命の原理を明さゞる可からず。蓋性命の理を講ずるは、敎學の先んずる所に非ず。且婦女の學には、不急無用に屬すと雖も、道德の頽敗せるのみならず、道德を以て宗敎の任ずる所となし、或は習慣の性となす等の說に、蔽はるゝ時に當りては、亦已むことを得ざる先務と爲さゞる可からずして、人の母となりて、兒女を訓誨する責を

負ふ者に在ては、之を知るを急要となすべし、由りて次に、性命の原理を明す。

史談

木華さくや姫命の事を記し奉る

菅喜田和三郎

木の花さくや姫命は、大山祇神のむすめにまして、彦火々出見尊の御母にます、形容木の花の開みちて、光映く〱しきが如く美しくましけるによりて、御名はおひませるなり、天孫邇々藝尊の天下りましける折には、今の薩摩國吾田の郷ヿたりはまし〱き、かれ又の名を阿多都比賣ともよびまつれり、一日、邇々藝尊、笠沙御崎にて姫命に遇ひ玉ひ、その容貌よくいとけ高うましますにめで玉ひて、汝はたがむすめぞ、又兄弟ありや、吾は汝に婚まくほしとのり玉ふ、こゝに姫命、吾父は大山祇命と申して、はらからは姉石長姫一人ありと答へ玉ひて、さてあひまつらんことは、吾はえ申し奉らじ父の大山祇の神こそ申さめとて、御みづからの御答を、父の上におはせ玉ひぬ、是はおきて、邇々藝尊は、父神の御許にその由申し遣し玉ひ

ければ、父神いたく喜び玉ひて、御姉石長姫をもろへて奉り玉ふ、石長姫命は邇々岐の尊の御心にわかず思す事の坐々しければ歸され玉て、さくや姫の命のみ邇々岐の尊の御許にとゝまり玉ひ、おひまして、三柱の男子を生み玉ふ、第一の御子を火照の尊と申し、第二を火須勢理命、第三を火遠理命、亦名天津日高日子穂々手見尊と申す、これなん鵜草不葺合尊の御父にまして、神武天皇には祖父にわたらせ玉ふ、吾か國夫婦の道は、二産靈の神の御心によりて、はやく伊弉諾冊二柱のはしめ玉へることとあるを、こはいとあがれりし、上代の、極初時代にてありければ、そをつばらにことだて、あなぐりいはんは、中々にひがことなるべし、さるを近き世よ、生學者いで來て、伊弉諾冊二柱の記事を、醜猥小說の基本ぞとなし、又は之を外國ぶりの風俗に附會して、自由結婚の起原なりといひのゝしる、自由結婚といひ關渉結婚といふ、其の事のよしやあしやは、おのれこれを知らず、されど夫婦の大倫に至りては、吾か國には吾か國の定道大法あり、外國ぶりをかるをまたず、はたこれを學ぶをもちゐず、定道大法とは何ぞ、伊弉諾尊二神の、二産靈の神の御心に從ひ玉へることと是なり、木の花さくや姫の命の、吾は得申さじと言だ

て玉へること是なり、この定道大法こそ、吾が國のあらん限りは、かはるまじきものなれ、吾人のあらん限りは、志たがふへきものなれ、吾が國維新このかた外國ぶりの學術大に開けて、男女のなからひまでみなかれに志たがひ、握手接吻は、親愛のほどを現はす禮儀なりとて、稠衆公會の場所にもこれを耻ぢず、結婚は自由にあらざれば、百年の偕老を全くすることを得ずとて、父母の命を用ゐず、公園散策にも男女相たづさはり、乘車往復にも男女相いだく、昔寛政年間に、洒落本といふもの世に行はれぬ、これらのものは、いたく風俗を害すること多かりければ、終に絶版を命ぜられて、著者の中には、牢獄に下されたるものさへありき、さるを、今の世は、これ等風俗を害する事を、うけばりてあらがふものあるのみならず、世の人々またこれをよしとす、世の移り變りなりとはいへ、再び寛政の禁令を今日に見るに非ざれバ、風俗はいかゞ下ちゆくべきか、はた男女の定道大法をいかゞはすへき、そも〳〵男女結婚のさだめにおいて、自由といひ關渉と名つくるは、もとより比較對立の名なるが故に、一方にのみ就きて、そのよしあしを沙汰せバ、必ず二ッながらそのあしきふしと見いでつべし、只自由にまれ、關渉




皇孫曰吾
欲以汝為
妻如之何
對曰妾父
大山祇神
在請以垂
問
清綱敬書

にまれ、吾か國の大道定法に叶へらんは、いづれなるかを見るべきなり、すなはち伊弉諾册二神の、むすびの神の御心に從ひ玉へる、木華開耶姫命の、父神を先だて玉へる、御心を推して之れを則とせば、男女の道に於て、夫婦の道に於て、かく所なからんか、はた風俗のくづれたるをもかへしつべし、世の男女交際の事を云ふもの、結婚の大倫をとくもの、又自らそのちまたにあたらん者、中にも妙齡の婦女子たるもの、少しくこの定道大法にかへりみる所ありて可ならんかし、

馬飼歌依の妻の事を記す

三橋要也

歌依は、欽明の帝の御世の寮の御馬飼なりき。心まめに操正しくて仕へ奉りけれバ、帝のおほん覺えいとやむごと無きものにて、高きつかさをも授け給ひけり。それをねたしとや思ひけむ、或る人帝に讒ちけるは、「歌依が妻のよそふひの、世になく尊く美しきが、いといぶかしくおぼゆるまゝに、よく見侍れば、畏しや、大后の大御帯をなむ身に纏へりし」といふに、帝聞しめしていといたく、怒らせ給ひ、歌依を

ば廷尉のつかさにめして責め問はせ給ふ。いと苦しうたしなめられたれど、もとより知れる事にし有らねば、たゞ「我御帶を盗みたる事無し、これ讒者のことゝこそおぼゆれ。若誠我が盗めりとならば、いかでか天神の禍をも蒙らざらむ」とうけばり言ひたりけるを、はては苦しさに之堪へで、しもとの下に息絶えぬ。暫しありて、つかさの軒より怪しう火燃え出で、あはやと見る間に、いと盛りに廣ごりぬ。司人ども、歌依が靈のするわざなめりと思ひて、その子もりし、なかせの兄弟二人を捕へ來て、焰の中に沒げ入れむとしければ、その母馳せ來りて言ひけらく、「我が子は罪も無きに、又燒き殺し給ひなば、禍益大きになり侍らむ。正しき政行ひ給ひねかし。されど妾の言聞き入れ給はで、強いて沒げ入れ給はむとならば、此の幼き者を殺して兄をば赦し給へ。無き夫が記念とも思ひ侍らむ」とて叫び泣きぬ。司人いふ、「年長けたらむより、幼きを憐むこそ、世の常のならひには有れ。汝いかなればかくはいふぞ」と問ひけるに、母の言ふ、「この幼きは自生み侍りしにて、兄は先の妻君の生み給ひしなり。先の妻君この子を生みおきてみまかり給ひぬれば、再妾をむかへて育させ給ひたるを、今まゝ子なりとてこれをすて、誠の我が子を助けなば、黄泉

に坐さむ先の妻君、いかばかりか恨み給ふべき。此の願さへ叶はずば、生きて何かせむ。我をも共に殺し給へ」とて、倒れふしかなしみければ、さばかりつれなかりし司人も、あまりのいたはしさにや心折れけむ。此のよし帝に奏しけるに、いといたく感け給ひて、兄弟ともに赦し給ひ、あまつさへ御馬飼のかばねをば、兄もりしに下し給ひて、もとの如く仕へ奉らせ給ひけり。さて後にかの讒者もあらはれて、重き罪に行はれければ、歌依が罪なかりしもあらはになりて、その家久しう榮えたりとなむ。」あはれこの妻の心のかしこさよ。始めにいへりし言のはの、理ふかきは言ふも更なり。年たけたりしまゝ子を助けて、いときなき我が子を殺さんと請ひたりし心ばへの、世の常ならぬ雄々しさは、分別強き益ら男も、中々に及ばぬばかりぞかし。歌依が無き罪にみまかりしは、かへす〴〵も口惜しき極みには有れど、この妻無からましかば、千年の後までその冤を明め得ざりけむ。さては再家を興し、夫が忠誠を埋めざりし功績の高かりしのみか。帝の明けき大御心を傷ひ奉らで、御恵の程世に知らせ奉りたりしは、皆この妻の心ひとつに因れりしなりけり。今の世の女たらむ者にも、有らせまほしきば、誠にかゝる心になむ。

孝女幸の行實

ひと日暑さにえたへで、夕風をまちとりつゝ、あるふみやがりたちよりて、何くれの書ども見わたすに、いたく塵に埋もれたる書あり。手にとりて見れば、うは書に大阪島の内、燈心屋孝女傳と記し、初のひらに幸女の肖像あり。その次に幸女が手してかける孝の字あり。傍にかう女十五歳と記し、次に誰もみよ善をつむてふ家さくらといへる片詞を記し、傍書にかくみして從四位下菅原朝臣長昌と記したり。うちの題號には南問屋町孝子幸女行實と見えし、ふみのしりに浪華の市隱豹山逸人謹書。寛政二年戊三月とありて、さだかに著者の名を記さず。いかなる人なりけんいとをかし。かゝる書かき錄して、世にあらはすは、ひとり幸女が孝心をあらはすのみにとゞまらず。後の世この書をひもとき讀まん婦女のたれかは、この幸女がこゝろざしをゝしさにめでゝ、われもとおもひたゝざるべき。あなをかしの書やとおもふがまゝに、

わがなひ得て、ともし火のもとに、よみもてゆくに、世の中に得やすからざる孝女なりけり。孝あり、勇あり、忍耐力ありて、しかも義理にさとし。身纎弱なる一少女にして、貧しきが上に、且やまひになやめる兩おやをやしなひて、藥餌のたらはぬ事なからしめ、遂に兩親みまかりてのちも、他人によらずして一家を興せる事、實に丈夫も慙づべき志といふべし。いまこの傳を讀みて歎服にたへず。いさゝか文字のたがへる所々をかむがへたゞして、そが全文をかゝげ其事實を詳にし、併せて愚評を附記するになん。

井上頼文

ことし寬政二年春正月、攝州西成郡大坂島の内南問屋町、大和屋卯兵衛養女お幸、いまだ幼少にして、孝行の聞えありて、上より御褒美を賜はりし事を、委しく尋ぬるに、此お幸といへるは、もと天王寺村鍛冶屋何がしがむすめなり、母は父が心にかなはで、幸がむつきに在るうち離別され、まだ東西をだにわかち得ぬみどり子を、父が懷にして、近きはとりの人々に貰ひ乳などして、養ひつゝ、まづしき中にも幸が生ひ立つを樂みに、蝶よ花よともり育てける、

お幸五歳なる春、實父鍛冶匠何にがしふと風の心地とて病みつきしが、日を經ずして遂にむなしく成り果てぬ、亡き跡のいとなみなど、ハか〴〵敷執り計らふ者もなかりければ、西高津町に、河内屋伊兵衛といへる從弟ありけるが、此ありさまを見て、あはれの事におもひ、みなしごお幸を、おのが家に引き取り、何くれとこゝろを添へて養育をそしける、さればお幸これより他人の手にそだち、さま〴〵の艱苦を甜る事、あはれむべき事なりかし、

みなしごとなりて、他人の手にやしなひ育てらるゝ子等が、いひしらぬなげきをハえしらで、まとの兩おやのひざもとに、はぐゝまるゝ幸をおもはず、わかまゝなどいひつのりて、兩親の心をなやますをさなごたちよ、よく此件をよみて、おとなしくすべき事なり、

お幸六七歳の頃より、よろづにおとなしく生ひたちければ、其頃大和屋卯兵衛といふ人、伊兵衛と心やすく語りあひけるに、つね〴〵お幸がさかしきを見て愛しけるが、子とてもなかりしかば、養子にしたきよし望みけるに、伊兵衛いへるハ安き事なれども、貴様ぞんじの通りまづしく暮しぬれば、仕こしらへなども致すべき力な

し、夫さへ心得たまふならむ、おくりまゐらせんといふ、卯兵衛いふわれ元より、れ幸がさかしきを愛せる事なれば、唯こゝろ安くして、もらひたきよしなれば、伊兵衛得心して、お幸が十一歳の春、卯兵衛が方へ遣りぬ

凡下ざまの人の、養子をもとむるならはしと見るに、多くは資財ある家のを撰びとり、衣服調度はいはむもさらにて、持参金と稱へて、黄金をさへに添ひたるを求め、あるは心ざまのよしあしに拘はらず、みめかたちのよきを撰びとりて、成人の後は藝娼妓、或は人の妾かこひめなどにしたてゝ、おのれ世を安く送らんと、思ひまふるものあるを、この卯兵衛が如きは、衣服調度などには心もかけず、唯其こゝろざしよめでゝ、こひ請けたるは、下ざまよは、多く得がたきふるまひなりや、

此やまと屋卯兵衛といへるは、もと綿打ちの職にて世をわたり、女房さとは燈心をむきて、いとなみとせり、元來まづしきくらしなれば、召使ふ者とてもなかりければ、お幸父母によくつかへ、飯を焚き衣をあらひなどする事も、父母の業の手まどりは、ならぬやうに取りまはして、假にも常の子どもの、なぐさみたはふれを爲さ

ず、春は手まり、秋はをどりと、隣ちかきをさな子のいざなひたはむる事ありとも、かゝる事にも目もふれず、唯親々につかふる事のみに心をつくしけり、これなん天性自然の良知とやいひつべき、

おほかたの幼兒らは、朝に學校にのぼりて、教師に孝順の道をしめされつゝも、猶そを守らず、まして親のたすけをなさんの心は、露ばかりもあらぬがならひなるに、さるをしへも受けざるに、かく父母の職業のたすけをなし、あつくつかふるまでゝろの程こそ、あはれにもめでたけれ、

お幸、十二の歳、養父卯兵衛老衰して、綿打ちの職をする事あたはず、家に在て女房されど、一處に燈心をむきて、世わたりとす、お幸も同じく、燈心をむく事をおぼえけり、秋になりて、卯兵衛ます〳〵おとろへて、病の床にふしぬ、重き枕にお幸を近づけていへるは、御身はもと天王寺村、鍛冶屋何がしが子なり、去年伊兵衛方より引き取りてより、御身がおとなしく、つかへくるゝ嬉しさは、ひとへに實子にも勝りて、最愛くおもふなり、我つゝがなく、家業をもつとめて、御身十五六歳にもなりなば、よろしき人にもあはせて、老後のたのしみにせんと、つね〴〵お

もひしも、今は皆あだし事となりぬるくては、此度のわづらひ、こゝろよかるべし
とも覺えず、もし空しくなるならは、母さはによく事へて、過活を懈怠なく、いと
なみくるゝならば、われ死して後、千僧供養にもまさりて、嬉しくおもふなりと、
幸が頭を撫て、なみだにくれければ、お幸おとなしく答へていへるは、とゝ樣、さ
やうな心よわく思ひたまふな、やがて藥もまはりなば、こゝろよくなりたまふべし、
天地のうちに、妾が親御とては、お二人より外になきものを、何とてかくはかなき
事をいひたまふぞ、とゝ樣、もし百とせの後、もしもの事ありとても、妾事業を出
精して、母樣よく事へ申すべし、これのみは心やすくおもひたまへといひしかは、
卯兵衛とかうの答はなく、只うれしなみだにくれ居たり、

幸女が、父卯兵衛にこたへたる、言の葉のをゝしさよ、そのありさまの、今
まのあたり見ゆる心ちして、あはれさいはむかたなし、

かくて日の經なるにしたがひて、いよ／＼賴み少くなりて、卯兵衛もあしたの霜と
ともに消はてぬ、お幸は只涙にくれてふし居たるを、母さはいろ／＼にいさめつ
ゝ、とも／＼に跡のいとなみ、とふらひの事まで懇に執り行ひぬ、お幸わけて十三

おやの爲
こゝろ
つくしの
おくに
こそ
ひこの
かゝみの
やまハ
あり
けれ
八田知紀



歳になりぬ、母はさはに事ふる事又世の倫ならず、まづ其あらましをいはんに、わしたにははやく起きいでゝ扉をひらき、あさ飯のこしらへなどして後母の枕上にゆきて、樣子をうかゞひ、晝は終日燈心をむき、夜も四つ過三更の頃まで、夜職にふうし、夏の日の暑さ堪へがたきには、團扇もて母をあふぎ、冬の夜の寒きには、母の足をおのが懷にして寐、行くを告げ、歸るを申し、何事によらず、母のむねにたがふ事なし、

○かよわき少女の身として、病のみとりだにあるを、そのひまに手しごとして、生活の道をたつる忍耐力は、なみ〳〵の輩のうけても、およびがたき事ぞかし、

（未完）

家政

育兒小言

武谷水城

育兒の法を記すには順序あり、多くは始めに妊娠中攝生の心得方を記し、次に小兒の取扱養育の法、病ある時の心得方等を記し、最後に心志思想に關する敎

へ方に及ふ、世間に刊行の書共もあり、只いづれも前の二者は記事詳細、後の一者は稍省略せるが多し、玆には主として、母の行儀感化の兒の心志思想に及ぼす故由を、二三の書を涉獵して、思ひ出るまゝを記しぬ、

婦人の職分として、勤むへき事柄多かる中に、家内の治め方と子女敎育との二つは、最も重大の職務にして、其中にても、特に育兒の任ばかり、至貴至重なるはなかるべし、抑子女の敎育といへバ、父又は、善良なる敎師に任すれば、母にさまでの關係無きが如くなれども、此謬見こそ、實に其兒の生涯を、毀るの根元にして、大なる誤なれ、小兒此世に生れ出て、後數年の間は、二六時中已む時なく、母の乳養感化を受け居るのみならす、胎內にありても既に育兒の道ある事を知らざる可からす、昔者、英國に一人の母ありけり、四歲の兒を懷き、牧師の許に至りて、敎育の事は、いづれの時より始めて宜しきにやと問たりしに、牧師は答て、汝は四年の時を失ひ給ひしなり、汝の笑顏の光り、此兒の面を照しし時より、汝の兒を敎るの機會ハ、始まりけるものをと言ひけるとなん、されハ小兒の敎育は、生れて始めて氣息を吸ふ時に、始りたるが如しと雖、其實はさに非ずして、胎內に在る間の母の行爲思想習

慣は、自然に胎内に遺傳して、生れて後其兒の行爲思想の種子となるものなるが故に、胎内にある時の母の行爲思想は、最も肝要の事と知るべし、是を胎敎と云ひて、育兒の根元と爲るもの也」

人たるものハ、貴も賤も、男も女も、天地の惠みを受けて後、十ケ月の間は母の体内に宿りて、母体に密着し、体盤と名付るものに依りて、全く母体と相通し、母の血液は二六時中已む時なく、胎兒を循環滋養して、再ひ母体に還るものにて、全く母体の血液に依りて、生活し成長するとハ雖とも、其實ハ一体なる也、されハ母の身に感し觸るゝ事あらハ胎兒に傳へて、兒もまた是を感する事母に同し、例之ハ母藥用すれハ、兒もまた瞑眩し、母食用の道を愼まされハ、兒の体毒を醸すと等敷、母の志想正しからず、行爲善ならされハ、また其種子を胎兒に傳ふる也、されハ性質氣象の如きも、此十ケ月間に多く母より植附らるゝものなり、　(未完)

女禮諸言

有住齋

吾日本國の、萬邦に傑出したる事は、今更言までもなけれど、近頃やゝもすれば、

生學生のさがしふりに、もと何國の人種なり、應神天皇の朝に、百濟國より裁縫の二女を貢せしより衣服の制ありて、其以前は躶形同樣の体なりけんなど、取るよも足らぬ空言を吐く、ともがら出來て、吾國史上にうとき婦女子は、疑團をいだくもあるべし、抑皇國の人種は、神代より綿々として、決して他邦の種屬ならざるは、國史をひらき見て知るべし、養蠶紡績の道、及稼穡の業に至るまで、天神のなし初玉ひし事にて、衣食住、よろづ神代にはやく滿足せり、されば孤立の一國なるは論なきなり、其上天然の美風具はりて、神を崇ひ、君を尊み、父母を敬ひ、兄弟を親み、妻子を愛しみ、朋友を睦ましむ、風俗殊に厚く、禮容を重みせし事など、史上所〻にいちゞるし、既に古事記神代に、火遠理命の海神の宮に到り玉ひし時の狀（日本書紀亦同）を考るに、君上の容儀みえたれば、又臣下の禮容も推量せらるゝ也、雄畧天皇紀に、皇后避床而對曰ともあり、又仁賢天皇紀には、立ながら人を喚事の、無禮なるを、擧られたるなどにても、共に神世ながらの禮容、おごそかなりしは論なし、後の世になりて、天竺の佛學、韓の儒學、入朝して、固有の諸事入錯り、本末を正しく差別せられぬほどになりしによりて、色〻の說ども起れるなり、ゆめ〻

世の浮說はまどふ事なかれ、さて禮と云ものは、國体にも關する大切のものなるが故に、聖德太子の憲法第二條にも、專ら此事をいはれて、順逆をあやまらざらしめんとせられしなり、されど太古の禮容は、掲焉にみえたるものなくして今みるべくもあらねど、貴賤上下を正しく別ちて、亂らしめざるを本旨とせ、西洋の禮は又しからず、同等交際の親睦を本としたるなれば、自然亂りがちなり、是は國〳〵の流義として、我國は上古よりの法に從ふを順とすべし、夫禮と云ものはこむづかしき如くに云めれど、しからず、衣食住によりて、おのづから習へるものなり、天武帝の御代に、唐法によられて、立禮を用られしも、衣服調度の製、あらたまりたるによれり、又足利の代に、武家の禮法を制したるも、公武の衣服あらたまりて、武家は武家の一流になりしにより、座禮を起して太古はならひ制御の禮となせしなり、此法久しく行はれて維新の際まで連綿したるは他なし、衣食住に適せるが故なれど、今は西洋各國の諸事入錯りて、世上悉く忙はしきにしたがひ、暫く迂遠とよび、因循とあざける人も出來て、殆此道世に絶なんとせしを、こたび國光社にて、女禮の講義をはからるゝは、大幸と云べし、おのれ多年此道に熱心すといへども、いまだ其改

良法の完全なるを知らず、されど今日も維新以前と、諸事ことなれバ、足利時代の禮法を其まゝに施す事世に適せず、太古の法に從ふも、又成し難くいづれよしても、折衷禮發るべきの機運なるが故よ、從前のくだ〳〵しき、手數をはぶき簡易にして、古法にもはづれざるほどの、作業を女子に習ハしめんが爲、いさゝか條款を設て、漸次よ講演せんとするなり、こゝよ又一言すべきハ、流名の害なり、伊勢、小笠原、斯波、細川、今川、曾我、武田等、其他にもわかれて、甲流に右と敎るを、乙流に左と敎へて、互に順逆を正さず私流を押張るが故に、到底いづれよても難なきが如きに至るなり、此流名の僻を一洗して、順逆をたゞさゞれば、海外諸國の笑ひをまぬがれず、それ故よ今日講述せる作業ハ、流名ある事なく、只順逆のひながたと云ふべきほどの、ものと知るべし

女禮第一則

一進退作法　進出るよハ、左足よりあゆみ、退く時ハ、右のあしより、引て去るを順とすべし、

但座敷により、左座に貴人あらば、左足より引て去るべし、かやうの事ハ時宜

によるべし、立禮も座禮もかゝる事なし、

一貴人の前へ出る禮　座禮の時は、三の間にて御間の様子をうかゞひ知りて、蹲りて二ノ間の敷居の内へすゝみ入、平伏すべし、貴人近くへと仰あらば、右膝を少しうかめ、左膝をすり寄せ立て進み出、本間の敷居際の疊にて、左半足を引て其儘すわり、兩手を兩膝頭の前に突、右左右と膝を引合せて、兩手を膝の前へ双べ、静に頭を下げて、大指の上に、鼻のあたるほどを、よろしとす、ゑりはなるべくたけ隠るるを形容とす、其平伏の度は、一呼吸ほどなるべし、さて立つ時は右膝をうかべ左膝をすりよせて立、右左右と足を引て、振かへり退き入るなり、是は至極の敬ひの体なり、一段手輕く畧すには、次の間にて様子をうかゞひ進み入り、膝の引合せを畧して、平伏すべし、其外はかはりなし、

立禮の時は、次の間にて腰を屈め、摸様をうかゞひ、左足より進み入り、貴人の前にて踏揃へ右左と一足引、猶右足を引て跪き左足を斜に立て、頭を下くべし、手は膝に置なり、此時貴人右手を出さるれば、右手を出して握手す、かへすがへすおのれより先に、手を出すべからず、さて其まゝ立て、右左右と三足引て、振かへり、

退く事前の如し、

但是は英國の喫手禮と云ものにて、本邦の禮にはあらざる事と思ふは非なり、我國にても、太古握手の禮あり、神代卷一書云の、諾冊二尊の御誓をみるべし、又契ると云詞あるを以ても思ふべし、しかし神代の禮容は委く知りがたきによりて、泰西の法にもとづきしるすなり、

一行逢の禮　我左りをあけて、右に片寄り、貴人の通らるゝを待て、斜に貴人に向ひ座して平伏すべし、貴人は目遣ひせらるゝまでなり、さて貴人の後蔭みえすなりて立退くべし、同輩ならば互に我左をあけて、右に片より斜に向合ひて一禮し、一同に立て往逆なり

但此左右のよけ方、流義によりて區々なれども、我左りに貴人をよくるは順なり、されどもと武家の禮は、我右の方によくる習ひなりしは、兩刀の鐺互にあたり合をきらひ、注意したるが故なれども今は其詮なし、又女子は猶更の事なり、立禮の時は、兩手を兩膝の下にあてゝよし、同輩には兩手を兩膝に置べし、

一中下相對す禮　同輩の時は、互に兩手を膝の前に置、頭を下ぐるも、疊より上五

六寸までなるべし、されど今ハ丁寧になり來りて、過たる如きも一概に改めがたけれバ、時宜にしたがふべし、

下輩に對するには、片手膝を下して可なり、それも上輩によるべし、

右の如く百ヶ條の端を開きて、漸次に講述すべし、されど作業ハ、筆の上にてみるに、わづらハしき如くにみえて、其實はむつかしからず、よく〳〵味ひても、此二三ヶ條をなし得れば、惣じてはおなじことなり、

茶事の辨

藤井行麿

類聚國史云弘仁六年夏四月癸亥幸ニ近江國滋野韓崎一便過崇福寺一大僧都永忠護命法師等率ニ衆僧一奉レ迎ニ於門外一皇帝降レ輿升レ堂云々大僧都永忠手自煎茶奉レ御云々

ある人おのれに問けらく、翁は茶を好てのみ、また其わざを人にもをしへ給ふが、いたつらにあたら月日をすぐし、がずのこかねにかへし器ものを弄玩ひ、其會ありて賓となりて主がりゆきしをりなど、別を告て家を出れば、歸るさまらうどども、饗食の調理うつはのよしあし、あがるゝまでかたみにいひドらひ誹りなどして、そ

同年六月壬寅令畿內幷近江丹波播磨等國殖茶每年獻之ト云ㇷ見エタリ

のやうおもつけくいとこゝろぐるし、いたう凝てこれをなん常のこゝろとする人は、職業ををこたり身のほどをわすれて、あてはかなることばかりをこのみ、いみじう驕てはつひにまづしき身となり、世にさすらひてわぶるたぐひもおほかなり、されば太宰が毀茶論にもいへりしが如く、毛を吹瑕を求る害ありて益なき遊技にはあらずや、こたへけらく、きこえさするところ其ことわりなきにしもあらず、ようせずば身をあやまつことにもいたりなん、しかはあれど、そこの今の給ふはきらへる人のあながちに憎て、つまはじきするが如くひたぶるにかた寄て聞なされたり、わがこのめることゝて取なしいふにもあらず、まづきゝ給んすべて世の間に有ること共、表裏なきものはあらずなん、茶のこともよきをとり出て、かぞへなばいくらもいはれぬべし、まろは若し時よりこれを好てつねに飲侍るが、顧ておもへばいとながき年月を一日も缺しことなくけふまでもつゞき來て、七十に隣る老を養ふものとせれば、良藥とおもふなり、世にある人のきらひてのまぬは口に苦きものなればなるべし、そこには喫て試み給へ、ものたうべし時脾胃の膨らかに氣の痞きて眠げになれるを忽とゞめ、精神やはらきてすがすがしうまたたうべしものゝよく消化て胃腑にをさまるものなり、

珠光ハ南都東大寺木工市檢校ノ男ニテ童名茂吉ト云十一歳ノ時出家トナリ稱名寺ノ中法林庵ニ住三十歳ノ頃禪僧トナリ京師紫大德寺眞珠菴ニ移轉ス珠菴ニ碑アリ

紹鷗ハ武田因幡守仲清ノ子左京太夫信久ノ男初號新五郎仲村泉州堺ニ住ス

其功能いとめでたし、かく能あるものながらわが國にてもちゐしハ、類聚國史ゐ見えたる、弘仁のころやはしめなりけむ、芽立を摘とり碾石もて其葉を挽、こまかなる抹となしさながら飲ものなれど、製法あしく培養のとゞかざるハ苦くしてのみがたし、建久正治のころ栂の尾の明恵といふ僧、柴の種を得て耘培ことによう心を盡し、鎌倉の將軍源二位また其府に在る大小名あるは僧侶座禪のむろゐもちゐて、觀念のねむりをさますものとせしを、珠光といふ僧そのよきをさとりて茶の會といふことをはじめたり、義政都ゐ在て東山殿と稱しころ、もはら此遊技を好まれ、次て小田豐臣にうつり猶行はれしがまた紹歐といふ僧、珠光に學ひて此會をなすに禮式をまうけ、風流侘にことそぎて黒木のはしらゝやの家根、田舍いへだつ庵室を造り、世をなれたるさまのすまひして、人を招き、みつから茶を點あるじするを、常のわざとなせしを、千宗易のちに利休居士といふ人、紹歐により受繼て此わざをせしが、此人ざえ高く、和敬清寂の四綱をむねとして此會の式正を定たりしが、其こころみやびかゐれもしろう、しわざもいと上手なりしより、世にもちゐられてぬけ出たる宗匠となる、これを中興の祖といふべし、いま流派さま〲世にあれどもみな此人

姓ヲ武野ト改シ時、種まきしたなし武田のすゑなれど死てぞいまは野となりにける歌道ハ西三條逍遙院殿ノ門人ト云
山谷カ演雅詩ニ
江南野水碧於天中有白鷗閑似我ト云句ヲ愛シ
一閑齋紹鷗ト號セルト歟
堺ヨリ京都四條戎社ノ側ニ轉住シ大黑菴ト號シ
袋棚ト云棚ヲ好テ造リ常用ナス
其時ノ道歌
わが名をハ大黑菴といふなれハふくろ棚

の掟てし法に基かざるはなし、また茶の具奢侈にながれ古器珍器をもてはやすことゝなりしは、公方義政のものずきより、唐のものなどあまたとりあつめ、國にても茶器陶器いろ〳〵造らせなどして、愛玩ものとせられしが始になん、時うつり世かはり天正の頃に至ても、豊臣太閤猶此會は棄給はず、軍事のことしげきが中にも、宗易、宗及などつねに召して介爲給ふ、すぐれ人のかく棄給はぬもうべなることなりけり、風流侘のわざなれば貴き賤しき隔なし、かたみに睦ひしたしむは、げに此會にしく席はあらずなん、狹き草菴圍のうちに、膝を寄袖をまじへて、上下の情を通し四方山のものがたりに、うきをわすれてこゝろをはらし、とけて交る其うちにも、禮式あれば亂るゝことなく、賓主歡ひを合すは此會なりけり、時を得て富る人もほこらず、世におくれてまづしき人もつくろはず、寂と侘とに式をまもり、もの淸うかはらかにしなして、身のほど〳〵に饗應すれば、野澤の根芹、山のさゝ栗、時をり〳〵の花にても興ありておもしろし、賓もあるじの心盡しをよろこび、主はまらうどのきたりしをねぎらひ、かたみにむつひかはして月雪花もともに觀る、これぞ信の友ならん、わが師大國隆正翁の歌に、

にそひちハて
めける
秘事ヲ肱ニコメタリ
永祿元年十月晦日卒ス五十三歳
堺南宗寺ニ葬ス

たすけつゝたすけられつゝいつまても
かはらぬ友のたのもしきかな

とよまれたるあり、誰もかくあらまほし、

(以下次號)

家事經濟談緒言

宮城四山

進んで國家の燈臺たらんことを期せらるゝ國光社は、世の必要に促されて、今また新に女鑑といへる雜誌を刊行し、世の女達の鑑とならん事を期せらるゝに付きまして、私は乃ち此女鑑の紹介により、常に最も敬愛する處の姉妹方に家事經濟の事を相談し、且研究もして、御互が住居ふ處の此國を一層富み榮たるものとなして、永久に子孫に傳へ、祖先と國土との鴻恩に、酬ゆる道の一端を闢きたい積りであります、」さて永い樣で、極短いものは、時間であります、見る間に時計の針が廻轉しまして、一秒ゞ一分となり、一時間となり、一日となり、一年二年は夢の中にて、五十年と

なれバ、どんな英雄でも豪傑でも、皆籍と替へねバなりませぬ、そして殘るものは芳名といひ、臭名といひ、詰り名バかりてあります、すると其子が此世を受嗣ぎ、また其孫が受け嗣ぎて、千年も万年も國が成立ち、立派に續き行くものであります、所か左樣永く續く間には、國の盛衰と申す事があります、

幸にも吾か日本では、開闢このかた二千有餘年、まだあまり烈しき衰頽もなく、外國から冦された事もなく、四海波穩かに續き來ましたが、維新以來外の國と交際を始めましたから、是後どんな影響が無いとも申されませぬ、國の榮る間は、吾々人民の幸福なる事は、申すまでも無き事乍ら、國か衰ふれは、遂には他國の奴隸となる事もあります、たとへバ吾々は、いくら働ても、金を儲けても、みんな外の政府から取上げられ、幸福といふ事は、皆奪はれて、極端に曰はゞ、赤衣裝の懲役同樣に、取扱はるゝ事であります、

國か衰ふれバ、何時も皆な此樣になるは、當然のこと、其れ故國の衰へぬ樣、奮發せねばなりません、何處の人でも、各々自國を愛せぬ人はありませぬ、國を黄金の世となして、子孫に傳へやうと思ばぬ人はありませぬ、また是非さう無くては、な

らぬ筈であります、
さて國の衰へぬ樣にするには、どう致すのが宜しき法でありましやうか、先づ國の元氣と申して、國家を愛するの心懸か第一でありますが、是れ計りではいけませぬ昔から衣食足りて、禮節を知るとか恒の產無きものは、恒の心無しとか申まして、國の富といふ事か、緊要であります、その國の富と申事は、どんなに大臣方が、おせり廻りても、學士論客が、口に泡を飛して、騷ぎ立てゝも、それで出來る事ではありませぬ、御互が最、手近なる處の經濟から、實行して富を造る事が責任であります、然るに男は外にありて、働くものでありますから、內の事は、女に最責任の付いて來るので、女たるものが經濟の心懸ある事は、最肝心な事と存じます、其處で一寸考へて御覽なさい、前申した通り時の經過は、實に早いものでアカ樣が孃樣となり、花の盛の嫁入時となり、遂に一家の主婦となるは、大陽が瞬きをする間に高き處に昇と同し事であります、明治の元年に御生れの方は、今年二十四歲、皆一家の主婦にゐて、其の家整理の任に當り、其の子敎育の大責務を帶びられ居る事は疑もない事でありましやう、

さて此處で、一寸日本の外側の事に就て、御話が少々必要になつたと思ひます、深く和洋の學に、心懸け賜ふ御方は、御存知でもありましやうか、日本といふ吾か愛する國は、四方海なる嶋國で、國の外面は、四時絶えず強き荒波の逆卷く如く、イギリス、フランス、ドイツ、ロシヤ等の各國、至る處に生存競爭、優勝劣敗といふ大波瀾が起り居りまして、漸々西洋から、東洋の日本に及ぼし來る事でありまして、是れが國家のために、一番に恐ろしいと申事であります、其處て彼等ハ表面にハ、極穩かな樣でも、其實は他國の利を奪ひて、自國のものとなし、他人のものを奪ひて、自分の腹を肥さうとするので、一寸の間も油斷はなりません、隣りの國にて、鐵砲を鑄たと聞けバ、此なたも負けずと軍艦を拵へ、軍艦が出來たと聞けバ、砲台を築く等、喧嘩戰爭の用意に、余念なき樣なる有樣です、個樣睨み合ふ間ハ、平和の樣に見ますけれ共、一端荒れ立ちて、萬丈の怒濤となるに及びては、其の餘波遂に來りて、我國を押仆さんとするやも、計り難き事であります、この時ハ我國の基礎が確固であれば、さして心配は無用の事ですけれとも、もし堅固なること磐石のやうでないとまをしますと、殘念ながら吾等ハ姉妹と諸共に、彼の白人種の附

庸隷屬となり、彼等の爲めに恥かしめられて、憂い目辛い目を、見るに至る事でありましやう、こんな事は實に言ふも、忌まはしき事なれ共、もし如此になりたとしましたらどうして、地下に祖先に見え、未來に子孫に、申譯致しましやうや、其處て吾等は一國擧りて一身同体となり、力を協せ心を一にし、何んでも國の御爲と相成る樣、心懸ねはならぬ事であります、

其の心懸と申すも、最手近に一家の富を造る事であります、家富めば國富み、國富めば軍艦を造るも勝手であります、兵器を造る事も隨意であります、數千萬の精鋭なる兵隊を養ふとも、容易く出來ます、そして國が磐石となります、殊に女の役目の最大切なる事は、其の子敎育の事で、其の子に完全の敎育を施し、楠公の忠節、豐太閤の雄大なる志想を養成して、大に邦家の爲めに盡さしむれば、たとへ躰軀は死せるとも、其の名は芳はしく千古に傳はり、子孫亦之を聞きて勵み、國永遠に太平なることでありましやう、之れが即ち女性の大義でありまして、また一生の最大快事で御座りましやう、世間往々貧にして、名を成せるもの隨分澤山ありますなれ共また貧すりや鈍せると申しまして完全なる文明の敎育は金錢の爲めに制せらるゝ事

常に多き事であります、是れ姉妹等と、家事を整理するの道を考究致しまして、殖產の道を、最手近なる處より實行致しまして、大に國家の御爲めに、いたしたい考へであります、

漫錄

朝な〳〵

此の一篇は、米澤藩主上杉治憲公、文化元年其の孫増姫の、畠山家へ嫁せらるゝ事に定まり、東の都へ參られし時、老のかた身にもとて、増姫の身のたきてとなるべき事どもを、書き列ねて、こを朝な〳〵一度づゝ讀みて、日々の守にせよとて贈られし文なり、されバ其の意もて、朝な〳〵とは名つけ侍りしならん、九十年バかり前の反故に侍れど、今の世の人の妻たるものにも、讀ませまほしく思ふまゝに、寫しとりて貴社に贈りぬ、餘白もあらば、登錄の榮を賜はんことを、

忍舍主人

此度手許より百里の遠き江戸へ出府致され、程なく畠山家へ引移り申され候事、愚老が勞念中々一方ならぬ事に候、是迄朝夕申進じ聞古し申され候事ながら、猶遺忘も有べきかと、老人の繰言左に記し申進し候、

畠山殿の家風格式第一ゐ取守り申されすこしも違ひ申されまじく候、

但、身の廻り、髮貌の事は、當家質素の風儀取失ひ被申まじく候、

清壽院殿飛彈守殿へ事へられうた、孝貞を專に禮敬を盡し申され、御二方御申付の事は、縱令いづれの不勝手の事たりとも、すこしも違背致されず、早速其通に相隨ひ申され、二度と御申なき樣に心懸られ、尤顏色に氣を付け申されべく候、

常に人の善を稱し、惡はゆめ〳〵口外致されまじく候、况人の麁忽仕落等、決して笑談いたされまじく候、

朝夕のはなし、五ッれ三ッ、三ッは二ッと致され、言葉多にならぬ樣ゐ愼み申され、何事も自決したる口上申されまじく候、身の禍は多く口より出る事に候、

人は堪忍が第一にて候、堪忍とは物をこらふる事に候、物をこらふる事のなきは、みな我儘より出で候、

何事も人より能く習ひ申されべく候、人に物を敎ふることなれ、先々年ゆかぬ内は、差扣へ申されべく候、

人を見下し候事、驕慢といひて、甚の不德にて候、何事も人を先とし、己を後といたされべく候、

假にも不行儀の体致されまじく候、人の見ざる處は、猶ふかく愼み申されべく候、

朝夕人の申進じ候事、顏色を和げ能く聞請被申、假りにもふせぎ申され候心有まじく候、

三時の食事、難非決して申されましく候、仕出次第用ゐ申されべく候、

立居振舞いかにもしとやかに、物ごとやさしくしはらしく致されべく候、

此方より附添ひ候者と、先方の者と、すこしも分け隔いたされまじく候、尤いづれも慈悲愛憐ふかく召仕申されべく候、

萬の事梅崎へ相談致され存寄承り可被申候、輕き事は登茂喜久へも相談致され、一己の存慮はまうせ申されまじく候、

歌、三味、狂言、踊等に、必耽り申されまじく候、

御酒ハ、小盃三獻を過されまじく候、
男女の間正しく、ぢだらくにならぬやうに、氣を付け申されべく候、
當世のはやりに移り、物ずき致されまじく候、
手道具の內、何品にても、清壽院殿飛驒守殿御望の樣子も候ハヾ、早速差上申されべく候、
申迄なく候へども、吝氣嫉妬の念、ふかく愼み申されべく候　是婦人第一の操にて候、
女大學をはじめ、是迄讀書致され候女の身持道認め候書物、毎日繰廻に四五枚づゝ讀み申され、ならぬ迄もその通にと心懸申されべく候、
往々清壽院殿飛驒守殿御心に叶はれ候とも、いつ迄も薄き氷を踏み、深き淵に臨み申され候心うしなひ申されまじく候、
右の條々、毎朝一遍づゝ讀み被申、終日取守られ、夜中休み申され候前に、今日此ケ條に違ひたる事はなきかと考へ申され、万一違ひ候心付も候ハヾ、明日は屹と改め申され候樣、心懸可被申候、幼年より養育進じ候處、斯く成長、此度出

府致され候事、誠に目出度大悦せしめ候、幾久しく繁榮いたされべく候、是まで朝夕しはらしくなし給はり候事、忝く存候、猶も此上御身に望む處は、上の條々に候、是をよく取守り申され、人にも人らしく唱られ玉ひ、桃夭の歌詠起り候は丶兵庫守殿、彈正大弼殿、三姫殿への孝悌、愚老への報謝、何か此上有るべく候、嗚呼再會期しがたく、愚老が面晤之に止まり候、此一冊を愚老とおもひ給はるべく候、

またこれに一首の古歌をそへて贈られたり、其の歌は左の如し、

乘りえても心ゆるすな海士小船
　沖には波のたゝぬものかは

左の一篇は、彼の賢母を聞えたる、ほうせう院の、息女の嫁せられしときに、つかはされしふみなり。世の母たる人、子を敎へみちびくよ、斯の如く心を用ゐたらんよは、女演說師女壯士流の、いまし〳〵しき女子は、生ひ出でざるべし。世の女子たるもの、此の誡をまもり、此の敎を心得たらんには、賢母

良妻たるの道をふみたがふることわあらざるべし。苟女性と生れたらん人ハ、賤のをだまきくりかへし、よくよみよくあぢはひ、つねに服膺して、みづからおのれをみちひきねかし。

菊の舎

ふとしてよそへこえ給ふべき事、まとにめでたうおぼえ候。申までもいはねども、身持やさしく、心おとなしやうよ、さゝれ石のいはほとなりて苔のむすまで、はんしやうし給ひて、まごひこやしなひ、わらはが行くすゑをもはぐくみ給ふべく候とねがひ候ほどに、ふでにまかせて少しまゐらせ候。いづれもいきとしいけるもの、そのことわりをしらざるものは、あるまじく候なり。

第一、慈悲の心ありて、人をあはれみ、むしけだもののうへまでも、露のなさけを、かけまくもかたじけなくも思ひ給はゞ、青柳の風になびき、春の雪の梢につもりたるがごとく、物やはらかに人の心をしり、ひがめるこゝろをおしなはし、さてまた心のうちは、岩がねよりもかたく、あだなるこゝろふるまひをきらひ、ひとすぢに心をむけ、賢臣二君につかへず、貞女両夫にまみえずと、くれ〴〵このことわりを心

にかけたまひて候はゝ、神や佛も御まもりめもおはしましたまふべく候。

第二に、客人などわたり候はんとき、うちにはいかやうなるむねんの事候とも、いさゝかもそのけしきを見せず、なにとなきやうにとりなして、たかきいやしきけぢめなく、にほ〳〵と打ちむかひ、春は花うぐひす、夏は卯の花ほとゝぎす、秋は千種のはな月のうはさ、冬は雪霜ときしらぬしくれなどの、をりにふれたるものがたりなどして、いかにもねんごろにとりはやし給ふべく候。されどもあまりに年わかき人の、むつまじげなるも、よそめいかゞあるべく候や。たゞなにとなくなぞらへて、かたしのぎなく、あい〳〵と候ん事あらまほしく候。

第三に、めしつかふ人疎略をなし、おもふやうにならず候はゝ、しのびやかによまいと、うらみをもいひかはしたまふべく候。それにてもかどなどやうに候はゝ、折檻有るべく候。それも男などのきゝたまひ候やうには、口をしき事に候。いかにみめかたちうつくしきちご女房も、はらをたてたるかほばせは、見にくきものにて候。しかもわかき人の聲だかに候ては、あさましきとにて候。さて〳〵よまいとをも、きくまじき人にて候はゞ、こなたへかへしたまひ候はゞ、さのみまた苦勞にもなる

まじく候。男女もあまり短慮に候はゞ、なんもむらもいでき、めしつかはるゝもの
もたいくつなれば、よそにて悪名をもかたり、のちにはにげ候ものにて候。
よし野なる、なつみの河の、かはよどに、かもぞなくなる、山かげにして。
此うたの心は、よどの川は水はやく候。かもは水のうへにすむ鳥なれど、あまりに
はやき所にはかなもず、かならず河よどゝて、水のよどむ所にすむものなり。いは
んや、人間はけはしき所には、ながらへがたく候。
第四には、夫婦あひだの事、たかきいやしき、むつまじくあらん事こそめでたく、
よそのきゝも心よくゝあるべけれ。たとひ萬世をおくり給ひ候とも、いさゝか男よ
見おとされぬやうに、たしなみたまひ候はん事こそ、なほ〳〵千秋万世をたもちた
まふべき事にて候。さて〳〵むしんの事候とも、さのみおもひたまふべからず。た
ゞうきよのありさまを、つら〳〵と見きゝたまひて、心をもみじかくなくすぐした
まひ候はゞ、行すゑもよき事あるべし。うたよ
ことたらぬ、世をなうらみそ、かものあし、みしかくてこそ、うかぶせもあれ。
つらけれど、うらみんとはた、おもほへず、猶行くすゑを、たのむみなれば。

いづれもみなきこえたるうたどもなり。さてまたきのありつねの女(むすめ)
風(かぜ)ふけば、おきつしらなみ、立田山(たつたやま)よはにやきみが、ひとりこゆらむ。
と詠(えい)せしは、その世までもやさしきことにつたへ候。さてまたさいみやうしの百首(ひやくしゆ)に、
人(ひと)の妻(つま)の、あまりりんきの、おほきこそ、ふたりのはぢぞ、かくもとゐなれ。
此(この)ことわりをげにもとおもひ候。しかはあれど、世になきあつかひ御わたりなどとは候はば、うらみをも、述懐(じゆつくわい)をも、のたまふべし。さあらんには、よそのきこえもくるしからず候。をとこにむかひ候て、或はぢんたち(陣立)、或はたかの野(の)、その外(ほか)とは道(みち)のくたぶれなどのときは、いかやうのうらみごとをも、いださるまじく候。その夜(よ)は、女なりとも夢(ゆめ)をもむすばず、ようじんを心(こゝろ)にかけ、人をもいさめ給(たま)ふべし。それもあまりことごとしきやうにいはんは、げはしく見(み)えてあしく候。あゝなにとなくあるべく候。

（未完）

和歌

月

東久世通禧

世のさまハ移り行けとも千五百秋かはらぬ月の光なりけり

心してうつしうゑすはなでしこのはなも千とせに匂はさらまし

孟軻母　　　　黑田清綱

妻の喪にこもりける地　　　　高崎正風

家もせにひとはつとへと獨身になりぬとおもへハさひしかりけり

益らをにありけるものをなそもかくめゝしくなりてねのみなくらん

あるよの夢にハおのれ玄關とおはしき一間に臥し居たるかふとめさめたる折しも隣の間の障子あけていり來るをみれハ亡妻なりけりおのれを見てかかるさひしきところに唯ひとりおはすへきことかはとそこの雨戸のなから計明居たるをみつけぬこれハいかにはしためとものさしわすれしにやはたぬす人のわさにハあらしうといひつゝたちよりてさゝんとするほとゆめハ覺果たり

くやしくもゆめハさめたり今一たひみせよそのかけまほろしにたに

亡人のうゑ置つる桑をみて

こかひすとうゑたる桑ハしけりけりいてゝつむへき妹もあらなくに

米利堅に留學中なる元彦かもとよりおこせたるふみを見て

日本婦人

父母とならへしるせる玉章とみるもこゝひや限なゞらん

長瀬鏡子

さきいてゝいはぬ色なるをみなへし千種の中に立ちそまされる

學園

和歌のしるべ

井口隆太郎

歌は心の花なり、折ふしにつけつゝ心の動くにしたかひて發く。されバ生とし生けるもの歌をよまざるはなし。梅櫻も美しき花とにほひ出でざらましかバ、誰かハめではやさん。心よは千萬の書を見わきさらめ、身よはいみじき功をつめりとも、此の道にくらからんにハ、よはひなき花を見る心地やせせん。わやしのしづ山がつのしわ

ざもおもしろく、おそろしきゐのしゝもやさしくなるものはみな此の歌の徳なり、まして猛き武士の心をやはらげ、鬼神をもなかしめ、世をさめ人をみちびくたすけともなるものをや。人たるものいかでかこの歌をよまざるべき。何とてこの道を學ばざるべき。されども、いかにこの歌をよみ、いかにこの道を學ばんと心ざすとも其のたよりよき道を得ざらましかば、たづね入るにたづきなからん。おのれいま初學の輩のしるべをとなりて、そのちかき道に案内せんとす。

和歌を學ぶ心得

初學の徒の和歌をまなぶには、左の心得なかるべからず。

第一　和歌は耳に聞き目に見て心に起る感情の、外に現はれたるものなれば、いたく巧によみいでんとすべからず。たゞありのまゝによみいづべし。

第二　和歌をよまんとするときには、必ず種々の感情の心に浮ぶものなり。其の感情の種々なるを、一首の歌によみつくさんと心ざすべからず。其の中のおもなるものをとりいでゝ、其の他は言外に聞えしむるやうにすべし。然らざれは詞づかひに無理の出で來て、こち〳〵しき歌となるなり。

第三　和歌は心もさることなれど、調子を第一とす。いかに心ふかく詞たくみなりとも、調子のとゝのはざるは、聞きおとりせられて、心に感動することの少きものなり。

第四　詞づかひに心を用ゐるべし。あまり俗言鄙語は使ふべからず。さりとていたくふるびたるは、また心うし。中古以下の歌詞をえらびてつかふべし。

第五　詞はみやびたるを使ひても、いたくつまりたるは、調子をそこなふものなり。なるべくのび〳〵として、詞にあまりあるごとく聞えしむるやうに心がくべし。

第六　心は氣高く、調子はやさしくすなほに、詞はみやびやかなるをよしとす。たとへば心は梅の香のごとく、調子は柳のごとく、詞は櫻のごとくなるべし。

第七　古き歌のこゝろはまなびても、其の詞はぬすむべからず。燒直は元物にまさることなきものなり。

第八　一通よみえたらんのちには、假字づかひ、語格等をまなぶべし。はじめよ

りあまりさるかたに心ひかるゝときは、かへりて害となるものなり。

第九　はじめの間は、短歌のみを學ぶべし。短歌をおもふまゝによみうるやうになりたらんのちには、長歌施頭歌今様のたぐひをもうかゞふべし。

第十　枕詞は、詞の足らざるを補ふために用ゐるものなれば、求めてはつかふべからず。但長歌には、おほく用ゐさるかたかへりておもしろし。序もまたしかり。

和歌の種類

和歌には左の五種あり。

第一　短歌

第二　長歌

第三　施頭歌

第四　今様

第五　歌曲

第一　短歌とは、三十一字にて一首となれるにて、五字七字五字七字七字と、五つの句

より成るものなり。例へバ左のごとし。

おくやまに（五）もみちふみわけ（七）なくしかの（五）こゑきくときぞ（七）あきはかなしき（七）

ほとゝぎす（五）なきつるかたを（七）ながむれば（五）たゞありあけの（七）つきぞのこれる（七）

此の五七五七七の句を、一句二句三句四句五句ともいひ、又、一首を二つにわかちて、初の五七五の三句を稱して、上の句或は本の句ともいひ、次の七七の二句を稱して、下の句とも末の句ともいふ。

短歌の句のきり方には、種々ありて一定せず。

第一　一の句にてきるゝあり。

見せバやな」（五）をじまのあまの（七）袖だにも（五）ぬれにぞぬれし（七）いろハかはらじ（七）

第二　二の句にてきるゝあり。

春すぎて（五）夏きにけらし」（七）しろたへの（五）ころもほすてふ（七）あまのか

くやま（七）

第三　三の句にてきるゝあり。

なげゝとて（五）月やはものを（七）おもはする」（五）かこちかほなる（七）わがなみだかな（七）

第四　四の句にてきるゝあり。

かくとだに（五）えやはいぶきの（七）さしもぐさ（五）さしもしらじな」（七）もゆるおもひを（七）

第五　五の句にてきるゝあり。

おくやまに（五）もみぢふみわけ（七）なくしかの（五）こゑきくときぞ（七）秋はかなしき」（七）

第六　一句の半にてきるゝあり

うつりゆく（五）くもにあらしの（七）こゑすなり（五）ちるか」まさきの（七）かつらぎの山（七）

第七　處々にてきるゝあり。

あすか井よ（五）やどりはすべし」（七）かげもよし」（五）みもひもさむし」（七）みまくさもよし」（七）

（以下次號）

和歌手ひきくさ

藤井行麿

うたはうたふといふ話語の體言となれる名詞なり、古今集の序に、花になく鶯水にすむ蛙のこゑをきけば、生としいけるものいづれかうたをよまざりける、とかゝれたるは鳥獸虫魚のたぐひも聲を發してなけば、それもうたふにてみなうたなりといはれしなり、また人のうたふ歌のことを、世の中にある人ことわざしげきものなれば、こゝろにおもふことを見るものきくものにつけていひ出せるなり、といはれたりそのごとし、人のこゝろ時にのぞみをりにふれ、喜怒哀樂の情うごきてうつろひかはるを、ことばにあらはしうたひ出れはやがて歌なり、このうたの濫觴神代の太古は文字の數もさだまらず、長きもあれは短きもありしを、須佐男命八雲たつの御製ありしより、三十一字となれるなり、此大御歌謠わぐゐにしらべ高く、格正しくして、餘韻えもいはれず、わが國歌萬代不易の定格となれるもうべなりけり、こ

の御製のごとく五もじ七もじにて斷れまた五文字にてこりて、七もじ七もじとをさまるを本格といふ、五七五の句を上句とし、七七の句を下句とするを、變格といふものこの原因なり、また長歌、施頭歌、混本歌、などいふ古體あれども、初學のほどハまづおきて、今体のことばにて三十一字の定格をよみ習ふべし、古人の作例部類集など見るも、近き世の人のよめる歌集を見るべし、わかりやすくしてさよりよし、草野集、鴨河集などよし、言葉よせあるものは、ふるの山ぶみ、和歌うひまなびなどみよるべし、古今集はつねに手ならし暗記するよし、一日に三首づつおほゆれば、一年みてすむなり、うたの勅撰ハ古今にはじまり廿一代集まであれども、後撰拾遺後拾遺金葉詞花千載新古今これまでを八代集といふ、かならず見るべし、とりぐにおもしろし、これよりのちのハまづ見ぬもよし、歌をよまむにハ雅語と俗語とをわかち、俗語をまじへず、雅語をもちて雅調によむことを旨とつとむるが肝要なり、いまハ題によりてよめども、むかしハ題といふことなく實景實事をよみしものなり、寛平延喜の頃より屛風の繪にうたよましめ給へることとつねにおほくなり、それよりうつりて實景をはなれ題によりてよむことゝはなりしなり、撰集に題しらずとある

は其よめるをりのしられぬを、あつめし人のいへるにてよみ人のことば書にてなし、いまの人初心のほどはみづからの歌に題しらずとかくはたがへり、堀河天皇の御時、百首の題をいだして歌めしけるよりことおこりて、組題といふもの追々さかりになりにたり、禪林寺殿七百首、爲家卿の千首など、のちにはおびたゞしく、題詠することいまも宮中の御會をはしめ、神社の奉納、家々の月次兼題、會日當座の探題などいひて、題詠することとなれど、題を得ても題とおもふべからず、やはり實景實事になして、花ならばはなをこゝろのうちにさかせ、月ならば月をこゝろにいだし、それを見る心になりてよむべし、またむすび題といふて、山とか河とかとりあはせある、其山河をよそにしてよめば傍題といふものになりて、題にかなはず、また花もみちなどよみてもそのよめる所のどこともしられぬを、地のたゝぬうふとてきらふなり、師大國翁のうたよむふとへとてをしへられしに「うたよむは弓射るに似たり」、題は的なり、意は矢なり、ことばは弓の如く、しらべは体のごとく、よむは射るがごとし、題によくあたるべき意をもとめ、ことばとしらべとの力によりてよみいだすなり、意よくてもことばあしきはあたるべき矢の弓あしくてあたらぬに似たり、

意こそよく題にかなひても、調あしきはきゝぐるし、いかほど的にあたりても、体あしきハ見ぐるしきがごとし、必竟弓ハ射るといふ一言が要なり、うたもよむといふ一言を要とおもひてありぬべし、

百人一首和歌解

井口隆太郎

百人一首ハ、あまねく世にもてはやされて、上は尊き人々より、下ハ賤しき山がつに至るまでしらざるものなし。されど其の詞を解し、其の意を味ひしるもの、はたまれなり。茶を喰ひて其の甘きことをしらざる憾なきのみならず、この集をえらばれたる定家卿の意にもそむくならん。因りて、今貴賤老幼の差別なく、いかなる人にもさとりえやすからんために俗解となし、其の大意を示す。

天智天皇

秋の田の苅ほのいほの苫をあらみ我衣手ハ露にぬれつゝ

稲のみのりたる秋の田を、鳥や獸などが荒してはならぬゆゑ、假りに小屋を作つて番をして居ると、其の假屋をふいてある苫の目が、あらいからして、上よ置く露が、其の目をもり來て、中に居る我が袖は、朝も夜も、びつしよりぬれつくして、なんぎなることであるわい。」かりほは假庵にて、假りに作りたる小屋なり。あらみは粗さにと云ふ意。ころもでは衣の手よて、袖の事なり。此の歌は、天智天皇が、御身をおし下し給ひ、土民になりかはりて、よませ給ひたる御歌なり。百姓の辛勞をいたはらせ給ひし御心のほど、ありがたきことにこそ。

持統天皇

春すきて夏きにけらし白妙のころもはすてふ天のかく山

今年もはや、春がすぎて夏が來たらしいわい、あの天香山を見ると、眞白になつて居るが、あれは百姓どもの、夏着よする白き着物を乾してゐるのであるさうな、あれを見れば、もうきつと夏になつたに相違ないわい、」しろたへは白栲にて、未だ染めぬ白き織物を云ふ、

此の歌は、萬葉集には、「春すぎて夏きたるらし白妙の衣ほしたり天の香山と」あり。さるを、新古今集にかくあるは、あやまりて傳へたるか、又も詞をその時代の風に直されしにや。しりがたし。

柿本人麿

足曳の山鳥の尾のしだり尾のなが〳〵し夜を獨かもねむ

あの山に居る山鳥と云ふ鳥の尾は、しだれて大變ながいものであるが、其の山鳥の尾の長い樣に、此の非常に長い夜を、たゞ獨で寢ることであるか、なぜ待て居る人が來ないかしらん、さても寢屋さびしいことであるわい。」足曳は山の枕辭。「ひとりかもねむ」は獨寢るとであるかと云ふ意。「か」は疑問にて、「も」は唯そへたる辭なり。

此の歌は、上の句は下の句の「なが〳〵」といふことをいはんために、他のおもしろき詞をもて、いひつゞけたるものなり、かゝるうたを序歌といふ。

山部赤人

たごの浦にうち出て見れば白妙のふじの高ねに雪はふりつゝ

駿河國に田子の浦と云ふ浦がある。其の浦にふと出て、向ふ乃方を見たところが、眞白になつて居る富士山が見ゆる、そして、其の眞白な富士山に、又々雪がたいへんに降つて居る、さて〳〵奇麗な山ではあるわい。」

此の歌は、萬葉集には、田子の浦ゆうちいでゝ見ればましろにぞふじの高ねに雪はふりける」とあり。さるを新古今集には、かくあり。あやまりつたへたるにや。又はわざと其の詞を其の時代風になほされたるにや。しりがたし。

猿丸太夫

奥山にもみちふみわけなく鹿の聲きくときぞ秋は悲しき

一年の中には、秋が第一にさびしい時である。其のさびしい秋の中でも、奥山に散りしいてある、紅葉の中をふみわけて、あちこちちらに、鳴きありく鹿の聲の聞ゆる時分が、まことに秋のものがなしき至極の時節である、此の位さびしく悲しい時は、外にはとてもあるまい。」

中納言家持

かさゝぎの渡せる橋におく霜の白きを見れば夜ぞ更にける

禁中に、宿直とて、冬の夜にとまりて居ると、禁庭の御階のへんに、霜が眞白く置いたわいの霜の眞白になつたのを見れば、まことに今夜も、夜がたいへんふけてきたと思はるゝわい。

七月七日には、烏鵲と云ふ鳥が澤山集りて、天の河を埋めて橋となり、棚機姫をわたすと云ふとあり。然るに、其れハ天上にあるより、天上にある橋を、すべて鵲の橋と云ひつたへたり。天皇ハ天子と云ひて尊ぶより、天皇の居らせらるゝ禁中を、天上によそへて、雲の上と云ふ、それよりして、禁庭の御殿に昇る御階を、鵲の橋と云ひならはしたるなり。されば、此の歌にも、禁庭の御階を、鵲のわたせる橋とはよまれしなり。此の歌は家持か禁中に宿直したる夜、讀まれしものなり。

安倍仲麿

天の原ふりさけ見れバ春日なる三笠の山にいてし月かも

一面にひろ〳〵としたる天を、ずつと遠く東の方を見やると、まことに奇麗に立派な月が出てある、あの月ハ、自分が幼少のとき、故郷の大和國春日の奈良都に

居たとき、常に三笠山の上から出るのを見た月と、同じ月であるかしらん、月は二つなきものなれバ、ちがふ月でもあるまい。あの月を見ると、三笠山の上に出た月を見て居た故郷が、思ひ出されて、非常に戀しくなつてきた。早く日本へ歸つて、あの月の、三笠山の上に出るのを見たいものである。」此の歌ハ、安倍仲麿が支那より、日本に歸るとき、明洲と云ふ所の海邊にて、唐人どもが餞別の酒宴をしたり。その時、夜のふくるまでありければ、東の海より月のいでくるを見て、よまれしうたなり。土佐日記には、初の句をあを海原とせり。兩樣にいひつたへたるにや。又はもとはあをうなばらとありしを、かくいかへられさるものにやしりがたし。

雜報

●華族女學校の卒業式　先月十八日卒業證書授與式を行ひ中學科及小學科の全科卒業生及各級及第生に同證書を授與せられぬ當日の來賓ハ有栖川宮妃殿下以下百八十餘人にして左に揭ぐる如く西村校長の

演說中學全科卒業生総代加藤木の芽女の謝辭等もありたり

西村華族女學校長演說

今日ハ本校に於て第六回の學年を終り本科二人別科一人合せて三人の生徒に卒業證書を授與せり諸子か數年の勉强に依り今日高貴なる來賓の前に於て卒業の證書を得しハ諸子の榮と言ふへし男子の學問ならは此學校を出たる後更に他の學校に入りて修業せんことを勸むへきなれとも女子の學問は男子の如き高等なる學力を要せす他日良人に事へ兒子を育し一家を維持するには此學校の卒業にて其智識先つ不足なしと信するなり唯此上にも益修めて止まさらんことを望むハ婦德なり夫れ道德ハ一身の大本にして女子か良妻となり賢母となるは一に道德の厚狹に因ることとなり然れとも單に道德のみにてハ草木の根幹ありて枝葉なきか如くなれは智識を以て枝葉と爲し花實と爲し以て道德の根幹を助けさるへからす諸子能く道德を率ゐ智識を以て道德に從はしめ良妻となり賢母となり畏くも皇后陛下か本校を建給ひし聖意に副ひ奉らんことは是れ諸子か生涯宜しく盡すへきの本務なるへし

（加藤女史の謝辭ハ次號に掲くへし）

●覺束なし　行き通ふ都の街をなかむれハ、うすもの丶衣裳に、珠玉ちりはめたる象牙柄の傘、それを乘せたる車は、悉く富み榮えたる門にのみ歸るとも見えず、父母の苦勞を身にまとひて、心にもかけぬばかりか、いとほこりかなる孃娘の行くさき覺束なし

●卒業の後は如何　家を治むるに、最も大切なる儉約の一事ハ、主人よりも主婦の心掛一きは肝要なるべし、言ふが儘に、はなやかなる身繕ひさせて、學校に通はす母親の心底こそいぶかしけれ、か丶るさまにても、猶一家ををさむる質素の婦人となるを得べしと思ふか

●世の母等に問ふ　昨年ハ英語を學ばせ、當春以來ハ和文の稽古、今日よりは又、編物の指南を受け

しむる積り、何も時に隨ひ、世に適ひたる敎育をなすとの事、見識のほどいとめでたし、英語も、和文も、編物も、皆大切なるべし、されとこれよりも猶大切なるものあり、貞操節義の婦徳即ちこれなり、これなくては何業にたけたりともまた見る所なかるべし、今の世の中この大切の敎育ある事を忘れし母はあらざるか、

●屠龍の學　昔朱平漫といへるもの、支離益といふをのこに、千金を出して、龍を屠ることをならひしに、朱平漫生涯の中、一たひも龍の庖丁をなさではてけりと、莊子といへるからふみに記したり。かの人の益なき學にかゝづらひ、いそがぬ業に心をつくすを、屠龍の學といふハ、これよりおこれりとぞ。今の世の女子等よ、かゝるたぐひに、貴重の光陰を過ぐすことはあらざるか、己れに顧て自ら誡め玉ひねかし。

●親の用意　をさなき時ハ、萬事に心うつりやすきことさながら、鑑にものゝ映するか如し、さて其うつれるものハ又たやすく消ゆるものにあらす。善事も、悪事も、一たひ見し事、聞きし事ハ、生涯伴ひきて消失せさるものなり。只善き事を見聞する事の多くして、悪しき事を見聞することの少なけれハ、善人となることを得。之れに反して悪しき事を見聞すること多くして、善き事を見聞する事の少なけれハ、悪人とならさるを得す。其の善悪こそ實に其子一生禍福のつながる所なれハ、親たるもの心せずてハあるべからす。炎暑にハ涼處に置き、寒天にハ暖所におくか如きの愛ハ、禽獸猶能く之れを知れり。人の親たるものあらかじめ其子の生涯をはからすして可なりと云ふ可しや。

本月十二日發行

國光第三卷第壹號

代價壹冊金貳拾錢
郵稅金貳錢

國光業を創めし以來月を閲する二十有餘年を累ぬる三歳而して世能く吾が微衷を容れ今や第三卷第壹號を發刊するの運に逢はしめたり茲に恐れ多くも

兩陛下の御製を拜戴し德大寺侍從長の謹寫を得以て卷首に奉掲するの光榮を辱うせり噫吾社力未だ微なり然れとも扁舟に棹して怒濤を衝き孤杖を振て嶮岑を攀ち自ら任するに木鐸を以てし鞠躬努力以て天下の風教を維し元氣を回へし上

聖恩の万一に答へ下同胞の幸福を完うせんことを期す冀くは江湖忠愛正義の士茲に大に力を國光に借し以て之れか成功を速ならしめられんことを

社則

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御送之事○郵便爲替は東京**麹町**郵便局へ御振込可被下事○郵便を以て代金に換用せらるゝ時は一割増の事○別に領收書差出さず金員領收の上も直に女鑑を發送すべし若し強て領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未納の來書は一切受取不申候事

今回印刷の都合により發刊期日を後れたと爾後必す五日を以て發兌すへし

（遞信省認可）

女鑑

毎月一回五日發行

定價壹册拾錢
全國無遞送料
廣告料　五號字二十三字詰一行拾錢

發行兼編輯人　西澤之助

印刷人　長屋基彦

麹町區平川町五丁目十六番地

發行所　國光社

（東京築地活版製造所印行）